

工業の隆盛を招來したが、今日は權花一朝の夢となつた觀があるは、又以て他山の石とせねばならぬ事である。

何處でも、何時でも、人は近眼になり易く近い所しか見る事の出來ぬ弊に陥るものである。政治の中心が多く都會であるので、政治家の多くは都會生活をする。それで政治も政策も都會本位になり、人間の欲する文明的な機關も、文化的施設も盡く都會に出來それが整備する。故に日を追ふて便利となり、月を重ねて繁華になり、年を経るにつれて、享樂に都合よくなる。美味は何時でも味はへ、美衣は流行を追ふて着られ、大厦高樓たいかかうちうに出入が自由になり、それを獨占する事も出来る。然しそれは外觀的であり、皮相であつて、大衆は徒に目で見ると過ぎず、匂を香がされて味ふ事が出來ず偉い建物と意識するばかりで住んで見る事が出來ず、新型の自動車しやうぎやうが駆け廻れば廻はる程塵芥を呼吸せねばならぬ事になり、萬物を汚さるゝばかりであり、ホールやバーが如何に發達しても、それは特種の階級者へのみ提供されて、徒に羨望を煽らるの

みである。美人が目がさめる様に装へども、それは金のある者になびき、立派な藝術品や美術品や高價な珍品は、到處に飾られてあるが、それも亦金のある者に喜ばるゝのである。トルストイは

都會は奇麗であり、光り輝いて居るが、それ丈け裏面は醜汚であり、暗黒である。と喝破したが、全く其通りである。反感、怨嗟、呪咀、鬭争、嫉妬、虚榮、憎惡、の集團が都會の内容であると思へば、慄然りつぜんとせざるを得ぬのである。故に便利、繁華、享樂に憧憬して都會に集るものは、宛然飛んで火に入る夏の虫であると思ふべきである。それは都會ほど貧民の多い所はなく、敗殘者の多い所もない事に徴して、極めて明白であるのである。尚今日の人は巧利を追ふ淺薄な思想に驅られて、巧利を求むるに都合のよい所は都會であるとして、學問をした者、小金を持つ者は皆都會に入るのであるが、思ふ儘にはならぬ世の中の實情が尤も能く味はるゝのも都會である。功名を望んだ者が失業者となり高等遊民となる者は擧げて數ふる事が出來ず、利益を夢み



た連中が仕事をせぬ前に搾取されて素裸にされ、進退に窮せる者は枚擧に暇あらずである。全く都會は此世の地獄であり、修羅の巷であり、奈落の淵であるのである。

古より便利に馴れば虚弱となり、繁華の中に住めば輕佻に流れ、享樂の地に惰落の因が伏在するは分り切つた事である。都會生活者が殖へて病氣が多くなり、都會には野次馬が産物であり、都會に墮落をする者の多いは周知の事實である。故に都市に人口が集中して羅馬が亡び、人口の八割が都會に偏在して英吉利が衰へて來た事は、決して偶然ではないのである。我帝國は永へに福榮の國であらねばならず、國難に遭遇する度に、國運が進展せねばならぬ國體である以上、都市と農村は併進せねばならぬのである。吾輩は敢て都市を呪ふ者ではない、都市生活を罵る者でもないが、徒に都市生活をよいと考へたり、進んだものゝ様に考へたりして、都市生活を憧憬し、都市に走る者は愚なりと警告するに過ぎないのである。

従來の農村は餘りに政治政策に閑却されて居つたが爲めに、都市生活との隔りがあ

り過ぎたのである。然し、今日は農村と雖も、共同の施設が進み、共同團體の發達につれて、交通機關も當年に比すべくもあらずなり、教育機關も整備し、實生活をするに不自由を感じる事が少くなつて來た。故に農村の人が今少し目醒め、共同の力を利用し、共同の施設を進めば、農業の經營にも、社會生活にも便利と幸福とを増進し得るのである。然し、都市に比較をすれば、農村の不便、寂寞、苦勞の多いは、何時までも變りやうがないのである。其處に農村生活の特徴があり、鄙生活の長所がある事を自他共に認識せねばならぬのである。不便に堪ゆる爲めに剛健となり、寂寞の環境によりて着實の性格が養成され、苦勞の多い所に馴れて堅忍の素質が出来るのである。剛健、着實、堅忍は興隆の要素であり、彌榮を招來する性格であれば、何時でも何處でも、誰でも其性格を得るに心がけねばならぬのである。國家の永遠なる生命を維持し、其進展をはかるは、一に國民の剛健、着實、堅忍の性格に俟たねばならぬは、古今一貫の信條であり、眞理でもある。



世間の人には鄙生活は低級なりとし、非文化的と思ふがあり、農村生活者にも農村では美味が食へず、美服をまことふ事が出来ぬと考へるものがあるは、大なる誤解謬見であるのである。都會生活は金をかけてよくする事が出来、進む事も出来るのであるが、農村生活は金をかけないでよくする事も出来、進む事も出来る所に、農村生活の特典があり、興味があるのである。之は既に前述した事であれば、此處に繰りかへす事をせぬが、農村の人に此自覺が出来、此處に新なる努力が出来れば、農村は天地に親しむ事が出来る丈けそれ丈け、健康であり、文化的であり、安住の境地を招來する事が出来るのである。唯都市生活は金があれば何んでも出来るが、其反對に金がなければ人生の悲惨を痛感せねばならぬのである。農村生活は金がなくとも、或程度の生活、實生活は平等に出来るので、農村こそ樂土であり、樂土でなければならぬのである。

世の風潮に押されて、農村にも階級意識が猛烈となり、禮も規律も顧みられぬ様に

なつて來たが、それは長い間の地主、資産階級が横暴驕傲であつた反動である。農村の人が目醒め、自己の文明を建設するに新たな努力を輸す事になれば、共存同榮の施設を進めて富貧の融和が出来、上下の差別も緩和されて、農村樂土の實現を見るは、敢て難事とするに足らぬのである。それは都市生活には望み得られぬ事であり、都市生活者には企て及ばぬ事である。故に差別の觀念が薄くなり、差別の生活が徹底されて、實際的な生活を貴ぶ民風が擴充すれば、農村は共同の施設によりて、福利の増進が均霑するを得るのである。其處に農村生活の長所があり、農村生活者の恩典がある事を農村に生活する者は明確に知らねばならぬのである。

木綿を着て徳川は天下を取り、絹を着て天下を喪ふたと云ふ諺がある。質實、剛健堅忍は何んと云つても農村に於て涵養さるゝものであり、都市には望み得られぬ事であるが故に、農村に生活をする者は、其處に明確なる意識をして、質實を守り、剛健を固執し、堅忍に終始せねばならぬのである。農村が國家の基礎であると云ふのも、



農民は大御實であると稱するものも、それが爲めであることを忘却してはならぬのである。従つて虚榮の生活は農村に於ては永へに排斥すべきであり、奢侈に類する事は一切忌避せねばならぬのである。外觀は醜からうが、見た所は野暴であらうが安心立命は農村の生命でなければならぬのである。多少の不便不自由を忍んでも農村生活は簡易でなければならず、單純でなければならぬのである。毀譽褒貶の外に立ちて、無理をせず、餘計な事をせず、無駄な事をせぬ所に農村生活の權威があり、功德もあるのである。故に人の噂を気にしたり、他の批評を苦にするものは、未だ農村生活の眞諦を解せざる者と見做すべきである。

農山漁村の更生運動は、都鄙生活の差別を明にし、本來の面目を理解せしめ、誰でも農山漁村の生活の眞諦に迷はぬ様にせねばならず、農山漁村の生活が齎らす功德を知つて、農山漁村に安住する覺悟を持たしめねばならぬのである。都市に出ようか、農村に留らうか、左往右往、思案にふけるやうでは、如何なる計劃を立て、其實

行に忠實を期する事は出来ないものである。古人は心定まりて氣盛なりと訓へて居るが、農山漁村の生活に悟る所あり、農山漁村に安住する心が出来てこそ、更生計劃は眞面目に實行される譯のものである。

希望に燃ゆるは青年であり、虚榮に囚はるゝは女子であるが、何處でも同じ事である。それ故に更生運動につれて、青年の教育が大切であり、婦人女子青年の指導が肝要であるのである。彼等によく都會生活の内容を知らしめ、農村生活の眞諦に悟らしめ、國家のために、田園を守り、地方の特徴を維持する事に努めしめねばならぬのである。故に更生運動は單に經濟的にのみ馳せべきに非らず、教化の上にも最善を期せねばならぬのである。物質より精神、形而下より形而上、有形よりも無形、形式よりも内容を識別する教育訓練を必要とする。而して農村文化を建設して、農山漁村の者は其處の文明を誇る様にならねばならぬのである。それは農民の自覺に俟たねばならぬ事であり、農民の努力によつてのみなされる事である。彼等の住む町村が自治體で



ある以上、自治の力によりて農村の文化は確に發達せしめる事が出来、都會生活に優れる功德に浴せしむる事も出来るのである。其處に到らしむるのが、更生運動の目的でもあれば、計劃を立て、其實行を懲備する所以でもある。敢て都鄙生活の内容特徴を明にして、善惡に迷はず、良否に惑はざらしめんとするものである。

## 第十六章 生活指導の精神

尤も近きもの尤も遠き隔あり、の諺の如く誰でも生活に支配されながら生活を閑却する癖がある。釋迦の如き善智識と雖も、修業の當初食ふ事を考へなかつた爲めに、餓死せむとして、老婆に意見されたとあるが、それは何人にも大切な教訓であるのである。生活を離れて人生はない、人生を離れて何物もないのであるから、何人も生活に對して眞面目であり、眞劍でなければならぬのである。

世間の人には生活問題に干與し、研究する事を卑事なりとし俗事なりとするがあ

る。生活を眼中に置かずして修業したり講學したり勤勞するを哲人と褒めたり、學者と尊敬したり、藝術家なりと敬服するもあるが、それは生活に囚はるゝ事を戒しめ、それを排斥するものであつて、生活を輕んじ、生活を侮る事ではないのであり、そうあつてはならぬのである。

生命あつての物種子と云ふ諺は、千古不磨の眞理であり、時と處と人とを論せず動かぬ天則であるのである。それ故に生活を指導するは大切な事であるが、唯それ囚はるべき弊に陥らざる指導をせねばならぬので、従つて其處に指導の精神が明確にならねばならず、又たそれを明確にせねばならぬのである。此れ生活指導の精神を提唱する所以であり、此處に世人の注意を喚起せしめむとする理由が存するのである。

## 第一項 社會的

人は社會を離れては生活が出来ない以上、何人も社會的生活をせねばならず。社會



に存在する價值を有たねばならぬのである。

世が開けるにつれて、物の消費が盛になればなる程、吾等は社會と交渉が繁くなり、愈々生活上社會と離るゝ事が出来ず、益々社會事情に吾等の生活は影響を受ける事になる。今日の人は全く社會生活をなす者であり、孤獨の生活は許されないのである。従つて吾は社會構成の一人であり、社會は吾を抱有するのであるとの意識を闡明にせねばならぬのである。換言すれば、吾一人の生活は吾一人の生活でなくて、それは家族に影響を與へ、地方に關係があり、國家にも交渉があるのである。故に吾一人の生活は私すべきでなく、等閑に附すべきでない事が、何人にも理解されねばならぬのである。其處に公的生活が自覺され、絶對の私生活が認容されぬ所以が存在するのである。

吾等は何時でも人格の向上を心懸けねばならぬとするが、それは吾等の生活が社會に及ぼす影響を思へばこそである。斯る觀念の下に自己の修養を怠らざるものが社會

を構成すれば、社會はよくなり、發達もして、平和の天地が招來さるゝのである。修身齊家に務むる國民を抱有する國家は何處でも興隆もすれば彌榮にもなるのである。故に吾等は堅く社會人である事を意識し、社會のために一舉手一投足を粗略にせぬ用意がなけねばならぬのである。

〔二宮尊徳翁は推讓を説示し、今日は雖でも社會奉仕を唱導し、如何なる人でも社會のためにならねばならず、せねばならぬとするのであるが、それは社會人を意識するからであり、其意識が人の凡ての階級に浸潤するが爲めである。財ある者は財を以て財なき者は身を以て社會のために役立たねばならぬ觀念の流布は、人類社會の進歩であり、向上であるのである。〕

今日の社會は、平和なる殿堂を建つるが故の地ならし工作をなしつゝあると觀すべきである。階級を認め差別を敢てした社會は過去のものとなつたが、然し情性の爲めに尙階級もあれば差別もある。法律は人を平等に見教育上には貴賤貧富の差別は認め



ず道徳も亦機會均等を要望する様になつて來たが、社會生活には差別が今尙嚴存して居る。政治は多數を本位とせねばならぬが、少數者に私せらるゝ憾があり、政策は大衆を目的とせねばならぬが、少數者を擁護する癖が抜けず、經濟的には福利が増加されねばならぬが、偏賦の嫌があるは情けない事である。故に吾等は共同の觀念を一層闡明して、共同團體の活動により共同施設を進めて均等の機會が與へられ、福利の均等を計らねばならぬと同時に、社會理想に目醒めて、餘力を社會にさゝげる民風を作興せねばならぬのである。

今日は如何なる國民も國家に奉仕する觀念が高くなり、吾等日本人は日本精神に顯著なる自覺をすゝめて來た事は日本の強味であり、日本の特異性が偲ばれて嬉しく思ふ唯だ私的生活に囚はるゝもの跡を絶たず、私利私慾に驅られて他を顧みぬものゝ存在は我社會のためには痛嘆せざるを得ぬのである。近來、三井や岩崎や、住友などが相當の社會奉仕をする様になつて來たが、その風が他に傳染せず、他を動かすに到ら

ぬ事を遺憾とするのである。都市を見れば、現代の社會に不相應の建物が出來、現代の社會人には過ぎた觀樂場が出來、大衆の手前出來ぬ事を敢てするものが澤山ある。彼等は社會の風紀を破り秩序を害ふて平氣であり、よい氣にもなつて居るは、蓋し社會不安の招來さるゝ所以である。何時でも何處でも、社會の上層者が不謹慎であり、無自覺であり、無遠慮であるは禍根であり、病源であるが、平等の觀念が發達した今日、尙彼等の傍若無人の振舞を見るは憂國愛民の至情に於ては斷じて許すべき事ではないのである。聖代の世に、空前の不祥事件が突發するは、それが爲めであるを思へば、吾等は無遠慮の徒に反省を促さるゝを得ぬのである。それには社會的制裁の必要が痛感されるのであるが、而もそれが爲めに社會不安を招來する事は、如何しても避けねばならぬのであり、何處でもそれを防止する事にせねばならぬのであるが、其處に社會生活の指導精神が明確にならねばならず、明確にせねばならぬのである。大觀すれば、専門の智識があつても大衆を見る事の出來ぬものは、社會に暗いもの



あり、財産があつても私慾のために供せられて、大衆のために役立たせる事の出来ぬものは社會的の貧者であり虚榮に驅られて大衆を顧る事の出来ないものは、社會的に盲者なりと斷する事が出来る。従つて彼等も亦哀むべき者であり、助けてやらねばならぬものであるが、故に彼等のために具眼者は手段を講じ方法を案ずる親切がなければならぬのである。世には物に富むで心に貧しきがあり外觀を装ふて内容の醜きも悟らぬものがある。それが極めて多く擧げて數ふる事が出来ぬのである。なくて貧乏せるものは氣の毒であるがあつて貧乏せる者は、尙更氣の毒であり、同情すべきである。それ故に富者、有産家が公共公益慈善に投資して、大衆の社會生活に貢献するならば、貧者、無産者は國家のために、社會のために、己が業務に最善を盡くし各自の分擔に遺憾なき誠意を示さねばならぬのである。貧者無産者の誠意こそ智者の不明を照らし、富者、有産家の暗愚を目醒めしむる燈であるのである。

日月に私燭なし、とあるが、社會生活を指導する者は貧富を區別したり、賢愚を差

別してはならぬのである。物に恵まれずして貧乏するの、心に恵まれずして貧乏するの、貧乏は同じである。智識があつて分らぬのもなくて分らぬのも分らぬ事は同じである。共に感むべきであり、同情すべきであり、救はねばならぬのであるが故に、指導は物質によつて禍されてはならぬのである。世には貧乏人の不自由に同情して、富者、有産家の我儘に同情せぬ傾向があるは、社會生活の指導上面白からぬ事である。物質の缺乏に苦しむ者の惱は分るが、物質に恵まれて心の悩みに苦しむ者の悲哀を悟る事の出来ぬものがある。社會生活の指導に徹底せぬ所があり、不行届の憾があるは、それが爲めであるのである。之れ敢て社會的生活の指導精神を提唱し、そこに世人の覺醒を要望し、喚起せむとする所以であるのである。

## 第二項 經濟的

今日は經濟的生活に目醒めねばならぬ世の中になつて來た、何人も經濟を無視して



は社會に生活の安定を望む事は出来ないのである。社會の組織が經濟的になり、社會人の生活が經濟的に左右さるゝ様になつた今日は、知ると知らざるとを問はず、經濟的生活の渦中に投ぜられたのである。故に經濟的に目醒めた者は、競争場裡に優者の立場を獲得して、比較的幸福的な境地をも迎ふるのであるが、其處に目醒めざる者は如何に祖先の勸功による財産があつても、家格門地がよくても倒産破産の憂き目を見ねばならぬのである。明治維新は政體の變化があり、土族の階級が没落して農工商に供せられたのであるが、大正の維新は地主や財産家が没落する時機の到來と吾等は警告した事がある。それは明治時代より經濟的の力が認められ、年を追ふてそれが顯著になつて來たので、其處に自覺せざる者は、如何に大なる財産があつても、貴い歴史を持つてゐる門地の家でも、破産倒産の厄を迎へねばならぬと思つたからである。而も吾等の見た通りに世の中がなり經濟的の力が強くなり、奢るもの久しからずと同時に奢らざる者亦久しからずの現象が到處に表はれて、且那衆と認められた者が何時か形が

なくなり、貧賤の者と侮つた者の中から成金が簇出して、世の中は優勝劣敗の修羅の巷となつた観があるのである。

(官公吏であらうが、民間に働く者であらうが、經濟思想がなく、經濟的用意を缺き經濟手腕を持たぬものは、何時でも何處でも經濟的に不安を招來して、落付く事が出來ず果ては負債に攻められて、想像に及ばぬ、思ひしなかつた苦境に立ち、悲惨な最後を見るものゝあるは此處にも其處にも簇出する社會現象にあるのである。武器をとつての戦こそないから如何にも天下泰平の様である。而も經濟上の戦は一時一刻も休みなく、今や世の中は其戦が酣になつて居るのである。大にしては國際間にそれがあり、小にしては個人の間にもある。此處には負傷者が横はり、彼處には倒死者が算を亂だして光景は見るも哀れであり、思ふても慄然たらざるを得ぬのである。)

差別を認め、階級が嚴存した當時は、人間取扱をなした者は武士であり、武士丈けが萬物の靈長と認められたのである。故に當時の社會は、何事も武士を本位としたも



のであるが爲めに、經濟の原則も亦武士を目標としたのである。量入制出と規定したのは武士の經濟道を説いたのであるから、今日の如き四民平等の世の中に、それを一般の國民が守つてはならぬのである。今日でも官公吏は當てがい扶持であるから、當年の武士と擇ぶ所がないが故に、量入制出を經濟の原則と守るべきであり、守らねばならぬのである。然し、農工商の人達は、それを原則とすべきであり、従つてそれに則るべきでは斷じてないのである。然らば何を原則とすべきや、原則として守らねばならぬかと云へば、量入増入を原則としそれに則るべきであるのである。世には經濟學者が多く又た經濟を講ずる者も多い、經濟に關する著述も多いが、此の分り易い原則を説くものがない爲めに、農工商の民をして彼等が守るべき原則を辯へしむる事が出来ない爲めに、不相變量入制出を經濟の原則とするが故に、不況、不景氣となれば退嬰に陥り、消極的に墮し、不況不景氣を深刻にする憾みがあるのである。

今日は生活に要する最低限度を知り、生産費を算出して必要な支出額を知り、それ

以上に収入を上げる様に用意をなし計劃を立て、やらねば、實業に従事する者は經濟を順調にする事は出来ないのである。農家であれば自作自給を原則として生産費の低減をはかり生活改善を斷行して、以て支出の減少をはかるは當然の事である。然し今日の如き消費の盛なる時に於ては、如何に節約しても一家の生活費は六百圓内外を要する、それに生産費家業費を加へれば八百圓位はかゝる。子供を教育する爲めに、或は疾病に對する醫療費を用意するとすれば、千圓位になる。故に今日の農家は如何にしても、千圓以上の収入を上げねばならぬ事になる。それに於ては家族に何人の勞働に従事する者があるかを考へて見れば、尋常一様の勞働では間に合はぬ事になる。此に於てか、團體の力を籍らねばならぬ事になり、共同の施設に待たねばならぬ様になり、農業經營の改善をせねばならぬ事にも氣が付いて、農家は眞劍に研究工夫をせねばならぬ事になる。而も今日尙舊套を追ひ、因習に囚はれて、農業の不利を嘆ち、甚だしきは農業に對する執着心を喪ひ、信念を失ふ者あるは、經濟生活の渦中にありなが



ら、彼等が守るべき経済の原則に目醒めざるが爲めである。農民の指導者も亦自己の立場と彼等の立場とを差別する能はずして、自己の守るべき経済原則を以て彼等を律せんとし、指導をするが故に、農民は何時も徒勞の嘆をなす事を餘儀なくさせらるゝのである。

1 経済生活の指導は、何時でも何處でも自力自助の精神を根底とせねばならぬのである。時勢に順應する用意と、努力とを自ら新にする意氣込を有たしめねばならぬのである。(従つて今日の経済生活をなす者は少くも收支を明にし、勞働力を知るに必要な記帳をせねばならぬのである。如斯して勘定は可成月毎に或は半季毎に、止むを得ずば年末の勘定をなして、以て過不足を知り、勤怠を明かにし、それに對して計劃を新にする習慣を馴致せねばならぬのである。)今日の農家には尙改良の餘地が生産方面にも消費方面にも存在して居り、勤むる方にも儉の方にも改善してよい事が澤山あるが故に、計劃は必ず立つのであり立てられるのであるから、今日の経済上の苦境を脱す

る事は敢て難事ではないのである。

農林省が乗り出した農山漁村の経済更生は町村を單位として居るが、之も畢竟個々の農家を單位とせねばならぬものである。然らざれば農家を眞劍にすることが出来ず従つて町村で如何に立派な計劃が立つても、其實行が困難になる。人は自分のことになれば眞劍になるが、然らざれば余所事に心得て眞面目にならぬのが蓋し古今一貫の通弊である。今日農山漁村の多くが経済更生の計劃を立て、其實行難に陥つてゐるは、全くそれが爲めであるのである。故に今回農林省が事の面倒なるを知りながら、個々の農家の経済更生計劃を立てしめんとするは、それを考慮した爲めであるのである。農家として此處に自覺せしめ、自家の経済に計劃を立てしむる指導をなすにあらざれば、家も町村も経済上の苦境を脱出することは出来ないのである。

近來、豫算生活を高唱するがあり、更生計劃中に之れを實行項目に掲げてあるもある。之れは至極結構であり、やつてよいことであれば、やらねばならぬことでもある。



が、之れには記帳と勘定とが出来ねばならず、それが基調にならぬのである。而も消費を賢明にする用意と研究とを不斷にして、支出を増さないで生活の向上をはかることが出来ねばならぬのである。同時に支出を守りて社會奉仕をする余地がある様に、全力をつくすことが出来ねばならぬのであるから、其處には餘程の緊張がなければならず、工夫がなければならぬのである。

由來、生産には力を入れて、収入を上げんことを研究し、収入を多くせんことに努力し、可成多く金が取れる様にと精力を傾注するが、消費を粗略にし、それに用意と工夫とを輸さぬが、我國經濟生活に見る通弊ではあるまいかと思ふ。とるに任かせて費い、とればとる程費ふ氣になり、不時の利益を得れば、餘計なものでも得度り、持ち度なり買度なつて費つて仕舞ふ。財布は何時も金の「トンネル」となり金は通貨になつて仕舞ふは、經濟生活が意識さるゝ今日に於て、餘りにも情けないことであるのである。好況の後に不況が來、不景氣の後に好景氣が來るが世の習であれば、好況の

際に不況の準備をなし、不景氣の時に好景氣を迎ふる用意をなし置けば、誰でも好況不況に超越すること出來、景氣不景氣に動搖をせぬで、何時も涼しい顔で暮らせるのである。苟くも經濟生活をなす者は、斯くあらねばならぬのであり、斯くあらしめねばならぬのである。金のとれる時には盛にとるがよい、とれる時はとるべき時であるから、とる事努めて費はない。金のとれ悪い時、とれぬ時は、金を費ふ時なりとして、事業を起し、改良を敢てし、擴張をはかれば、金がまわりて購買力が減せぬが故に、不況不景氣を招來せず済む。故に經濟生活をする者は、此消息に通して善處が出來ねばならず、此道理を知つて景氣不景氣を平均する力がなければならぬのである。不況を迎へて萎縮し、不景氣になつたとて恐縮し、出さぬこと、使はぬことのみ考へて、退嬰し、消極的になるは、自他を損ふものであり、經濟生活の功德を破壊し、其權威を損ふものである。

君子慎其用とあるが、今日は君子に限らず誰でも其用を慎まねばならぬのである。



用には今日五通りの心得ねばならぬことがある。一に曰く信用、二に曰く應用、三に曰く利用、四に曰く節用、五に曰く善用である。用に知るものは經濟を知るものであり、用を遺憾なくするものは經濟家であり、經濟生活の功德を味識するものであり、用を慎む者は何時でも經濟生活に恵まるゝものである。今の人は理窟を知つて之を用ゆるに心付かず、理窟を言ふが之れを物事に用ゆることが出來ず、學問をしても之れを實生活に用んとせず、用ゐんと欲しても其用方を知らぬが多いのである。昔は槍持ち槍を使はず、三味線持三味線をひかず、金持金を使はず、と言つたものだが、今日、は學者學を使はず、技術者技を使はず、力役者力を使はず、と言はざるを得ぬ憾があるが、皆用を思はず、用を工夫せず、用の功德を味識せざるが爲めであつて、其愚や感むべきであるのである。之れ程、經濟學者が出來、經濟學が盛になり、經濟を思念する様になつて、我經濟界が振はず、國民が經濟的に苦惱を嘗めねばならぬ羽目に陥つたことは、經濟的指導が不行届であり、經濟の指導精神が徹底せぬ爲めであると斷

ぜざるを得ぬのである。經濟國民は經濟の目的であり、經濟の功德でもある以上、其目的が達せられ、其功德に浴することが出來る様にするが、經濟を指導する根本精神でなければならぬは、今更言ふも愚かなことである。之れ敢て經濟的生活の指導精神を高唱し、世人に反省を促す所以であるのである。

### 第三項 道德的

社會生活も經濟生活も、盡く道德が根本でなければならず、道德で律せられねばならぬのである。道義がすたれては社會は暗黒になり、經濟は墮落するばかりであり、人類の社會は他の動物の社會と差別がないことになる。勿論世が開らけ、人智が進むで來れば、當年の道德と今日の道德に相違を生ずるは當然のことであり、道德ばかりが進歩せぬ道理はないのである。昔は形式を見て裁斷をしたが、今日は意志を見ることになつたのは、古今の相違を見る一例である。昔は他のものを盗むだ者は有罪と決定したが、今日は盜まれる機會を與へ盜心を起こさせた者も悪いと斷ずる様になつた



のも、面白いかはり方である。

社會が複雑になり、事物が繁多となると、動もすれば道德が免度嗅くなり、餘計なお節介をするものゝ如く考へられて、敬遠したり邪間物取扱をする様になる。文明人は感情に馳せず理性によりて動くと言ふ後から、黨派心にかられたり、最良の引き倒をする例が、此處にも彼處にも多いのである。義務のみ認めて權利を認めぬは、片手落の沙汰であるは當然のことである、而も權利を求めて義務の履行をせぬも亦片手落ちである。然るに兩全を望み、兩全を正當なりとして、尙且つ片手落ちを敢てして、よい氣になつて居るも、今日到處に見受けらるゝのである。共存同榮は社會理想であり、機會均等は文化生活の理想であり、福利均霑は平和を招來する人道であると唱導しながら、昔ながらの差別は不相變存在し、偏在は社會現象として今尙認知されるのである。法律は權威が認められて、道德の影が薄くなり、理窟が勢を得て人道が閑却される様になつて來たことは、蓋し澆季の世の中である。

秩序が亂れ、風紀が頹敗した當年、日蓮上人は立正安國と絶叫された。今日の様に權威で横車を押し、金力で我儘が出来、多數の力を持つて無理をも通すことになつては正義人道を絶叫高唱せざるを得ぬのである。之れ特に社會生活に我を重すべきことを提唱した所以であり、遠慮すべきことを切言した所以でもある。二宮尊徳翁は經濟生活は道德と絶對に離るべからざるものであり、經濟と道德とはあざなへる繩の如しと説かれたのは、千古不磨の金言である。英國のラスキンは

正直なる勤勞、 公平なる分配、 賢明なる消費

と明斷を下したのであるが、二宮翁の説を具體化したに過ぎないのである。經濟生活は勤勞を旨とせねばならぬは當然であるが、勤勞は何處までも正直でなければならぬ詐偽や欺瞞は飽くまでも排斥すべきであり、人の褌で相撲をとる様な狡猾なやり方や、人の見る所ばかり汗を搾る様な横着なやり方は、斷じて許すべからざることである。同様に己の欲する所は他に之を施し、己の欲せざる所は他に施さずといふ道德を



基調として福利の均霑をはかるべきであり、損失は他にかけぬ用意をすべきである。若しそれ消費に至りては、自他を益することではなげねばならず、國家に役立ち社會に貢献する様にせねばならぬのである。即ち道德を主とした經濟行爲でなげねばならぬと云ふのであつて、經濟に囚はれて道德を無視したり、道德を粗略にするは、眞の經濟生活ではないのである。

今日の人は金のために動搖する憾があり、金の爲めに進退する恐がある。之れは經濟を主として活動する者ばかりでなく、政治的に等しく其弊を見るのである。金を見て自己の使命に生きる能はざるは、蓋し盲者である。金が儲かるをよい事とし、俸給の上るのを嬉しいこととして、之れは醒醒して職務の貴いことに悟らざる者は、愚者に非らざれば痴者である。權利のみを主張して義務の履行をせず、其の獲得に死力を盡くして義務を顧みぬは、不具者になるを知らざる馬鹿者である。恩を知らず、知らんと欲せず、人の厄介になるを權利と心得てよい氣になつて居るは、低能の標本である。

る。夫れ道を認め、道を踐まんとする者は、損をして喜び、金を投げ出して雀躍し、己が使命に遺憾なき努力をさへげて満足し、己が義務を全ふするに最善を輸たし、知恩報徳の生活を得て歡喜するものである。個中に社會の平和は招來され、人類の幸福は誘致さるゝのである。衣食足而知禮節、倉庫充而知榮辱は世の常であるが、道中衣食ありの悟を開くが文明人でなげねばならぬのである。

吾等日本人は物よりも心を重んじた民族であり、財物よりも立派な心を持つことに努めた國民である。今日高唱さるゝ日本精神は、公の爲めに、國のために、君のために身命をさへげて各人の分擔に最善を輸さむ心であり、魂であるのである。萬物の靈長たる人類は、物の上に位すべきであり、物に制せらるべきものでないとの見識に於て、人間としての存在價值に目醒めたのは、吾等日本人であるのである。一切の道德は其處に由來し、公德も私徳も亦其處に源因するのである。故に世界は廣く人は多しと雖も、人類本來の面目に目醒め、人類の生存價值を認識して、天賦の使命に生きる



が、吾等の正義であり人道でもあるのである。富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はざる生活は、正義人道の生活であり、社會生活も經濟生活も共に其生活を基調とせねばならぬのである。今日は經濟更生が高調され、更生と云へば經濟的に重く見る傾向があるが、更生は精神的が先決であり、吾等は正に大和心に魅へり、日本魂に立ちかへり、日本精神、皇國精神に復活せねばならぬのである。之れは行ふ所義にかない、なす所道を踐むことにならねばならず、せねばならぬのである。吾等日本人は公のために、國の爲めに、君のために身命をさしげること大義なりと信じ、大義に生くるを日本人の踐むべき道なりとするものである。

立憲政治の下に政黨が出来るは必然のことである、従つて政黨が内閣を組織し、所謂政黨政治が行はるゝも亦當然のことである。而も政黨は政權の爭奪をこれ事とし、國利民福を度外し、陛下の震襟を惱まし奉る様になつては、國民の反感を招き、遂に不祥事件さへ突發するが故に、議會に最大多數を得たる政黨が、手も足も出す能はざ

る境地に陥るは、大義を忘れ、人道を無視したが爲めであるのである。故に人多き時は天に勝つが如く見ゆると雖も、天定れば人に勝つの道理は、何時もかはるべきではないのである。近時我國民の努力は當年の粗製濫造の嘲を一掃し、我邦品は海外の市場を到處で占領しつゝあるは、面白い現象である。先進國を以て誇つて居つた國々までが狼狽し、關稅政策を以て我邦品を排斥せんとするも、ものが良くて値が安ければ、經濟上の原則によつて何處へでも進出する。我邦品の排斥が愈盛になつて、海外への進出は愈盛になるは、道義に於てやましき所がないからである。故に印度が如何に邦貨を排斥するも、我海外貿易は不相變進展するばかりである。

要之、正義人道は無敵の境地を開拓する唯一のものであり、最後の勝利を得せしむるものであり、自然の理法を明示するものであるが故に、吾等は何處までも正義を貴び、人道を恃まねばならぬのである。勢ひに乗じて事をなすは一時であり、慾にかられて成功するも槿花一朝の夢である。若し之れ道徳が顧みられず、正義人道がすたれ



て仕舞へば、國家も社會も滅亡するばかりである。故に興國民は何處までも道德を守らねばならず、社會の平和を愛する者は、何時でも正義人道を擁護せねばならぬのである。法を重んじ、勢を恃むは霸道であつて王道ではなく、修羅の巷を招來するも、平和の樂土を開拓する所以ではないのである。故に生活指導の根本精神は道德を尊重し凡てを道德的にすべきであるのである。

#### 第四項 宗教的

教育が盛になつて退嬰するは宗教であるは何處でも現象であり、經濟的に目醒れば目醒める程、宗教心が薄くなるも亦世界共通のことである。而も宗教はなけねばならぬものであり、人類の生活には宗教心は絶対に必要であるのである。人は宗教によつて心眼を開き、不動の境地を迎へ、向上の一路をたどることが出来るのである。

道德は人を相手にする規律であり、宗教は人間以上のものを認めての信仰である。物に囚はるゝものは人を見ることが出来ず、人を相手にする者は人以上のものを認む在るのである。

ることが出来ぬ弊に陥るは、今日の通弊である。吾等は道德を守つて平和なる社會を造り、以て生活の趣味を見ればよいとするが、然し其處には弱い所があり、動き易い所がある。故に心ある者は、道德を重んじて、更に一步を進めて宗教的生活に入るの用意をするのである。人類の向上はそこに在り、萬物の靈長である所以も亦其處に存在するのである。

勤勞は道德であり、知足安分も亦道德であるが、人は平等であることを明確に意識して已を社會にさしげ、全力を大衆にさしげるは宗教である。人類として四苦より解脱せしめん大願に身をさしげた釋迦は、宗教的であるのである。凡ての人の罪を償はんと、晏如として十字架に上げられた希望も亦宗教的であるのである。釋迦を佛と崇敬し、希望を神の人と禮拜するは、人類の宗教的心理である。人を相手にする者は、動もすれば人の見ざる所で横着をする。君子は獨りを慎むと言ふは易いが、之れを固く守るは容易の事ではないのである。故に道を踐むにも、徳を守るにも、守操を全ふするに



も、宗教に依る事が便宜でもあるのである。故に弱い者は宗教に依りて強くなり、愚かなる者は宗教に生きて馬鹿にされぬ様になるは、昔も今もかはらぬ事であるのである。

人を相手にする以上、毀譽褒貶は免れぬ事である。而も人は毀譽褒貶を氣にして、之れによりて動かされ易いものである。社會は之れが爲めに混雜し、社會現象は複雑になるのである。人を相手にせずして天を相手にする者は人の噂を氣に病まず、神や佛を思念する者は人の言論に動搖をせぬが常である。故に腹がすはる事も、心が落着く事も、判断を正くする事も、宗教に入りて初めて出来るのである。昔も今も偉人は多く宗教に歸依するものであり、宗教的信仰に生きる者が多いのである。

世の中が理窟攻めになり、利慾で動く様になつては、特に宗教の必要を認むるは獨り吾輩のみではあるまいと信ずる。長野縣は理智の人が多い所であり、理に走り、理性に勝つた人が多いが爲めに、宗教的生活をする者が少い所であつた。然るに今日松

本市を中心として宗教的氣分が濃厚になり、宗教的生活をなさんとする者が多くなつた事は、面白い現象である。成程、考へて見れば道德によりて安心立命は出来ぬではないが、宗教に入るはそれに到達する近路である。物の慾にかられ、金に迷ふた連中は、何時までも安心が得られぬ、悪い事をして居らぬと思ふが、社會の動きによつて不安が増すばかりである。即ち物足りて心足らず、物に恵まれて心に恵まれぬものは此處彼處に存在するのである。人の幸福は物を度外にしてはならぬが、物に依るよりも心に依る、足らで事足る心安きは幸福なる人の心境である。それは宗教に目醒め、宗教の門に入り、宗教的生活をして始めて得らるゝのである。今日は物に恵まれず、貧しきが故に不安を感じるがあり、心に恵まれず富むで不安を感じるものがある。有産と無産とを論せず、不安を感じる者は感むべき者であり、氣の毒なものである。而も彼等の存在は社會不安を招來し、危険を國家に招來するが故に、吾等は何處までも不安の因を除去せねばならぬが、それは宗教的生活に導くに限るとするものである。



人間以上のものを認め、其處に信仰を持つ事が出来れば、物よりも金よりも最高の寶を得るに因つて安心が出来る様になるのである。無産者が物の不足にのみ焦慮して安心を求むる事に氣付かず、有産者は物に恵まれながら安心する能はざるは、共に愚なりとすべきである。

物足れば足るにまかせて物足らず

足らずで物足る身こそ安すけれ

と讀むだ人があるが、無産者は此心境を持つ事が出来れば、物の不足を償ふ幸福を感じる事が出来様と思ふのである。

世には宗教的生活を消極なりとするがあるも、それは楯の反面を見て、其全面を見る能はざるものである。宗教によりて幸福を感じる者は、難有い事を意識し、感謝生活に入る事が出来る。従つて知恩報徳の道に生きる事が出来るのである。知恩報徳の道に生きる者は緊張し、精進し、努力するが故に、何事も積極的にする。嘆賞せずに

おれぬ忠臣義士の行動は、盡く君恩に感激し、人の恩に報むんがためである。暑さ寒さを厭はず、汗に塗みれて田畑に立つ農人は、天地の大恩に感謝するからである。神に依りて心に恵まれ、佛によつて心に與へられた者は、知恩報徳を敢てするのである。税金も拂へず、寄附金も出せぬ連中が、神社佛格に思切つた金を差上げるは、何時でも見らるゝ事であり、何處でも見る事であるが、それは知恩報徳の心によるが多いのである。艱難に遭ふて勇往し、故障を迎へて邁進するは、宗教を味ひ、信仰に生きる者にして始めて出来るが多いのである。故に宗教は人を消極的にするよりも、寧ろ積極的にするものである。織田信長も本願寺を攻めて手を焼いたのである。宗教は無限の力を人に與ふるものであるが故に、宗教に入つた者は如何なる事をも敢行する勇氣を有つが常である。

唯世の中には迷信があり、人を悟らしめないで迷はしむるがある。それは宗教ではない信仰でもないが故に、何時でも何處でも排斥すべきであり、排斥するが常である。



神をだしにして利を計るがあり、佛を種に慾を漁るもあるが、如斯は宗教の敵であり、信仰を裏切るものであり、尤も大なる罪惡とすべきである。

世の中には子の愛に溺れる者がある、愛子を喪ふて心が亂れ、氣が狂ひ、自己の使命を忘れて自殺する者すらある。情に於て慙むべきも、理に於ては愚の至りである。而もそれが人の弱點であり、人情であるが故に、斯る出來事の絶ゆる時はないのである。吾輩が秘藏の愛子を喪ふた時、同じく愛子を喪ふて悲嘆せる人から、吾輩の心境を聞かれたので、

たまはるも喪ふも亦神心

慈悲に二つはなきものと知る

と返事をしたが、全く吾輩は左様に信じて、自己の安心を得たのである。安心を得たる者の幸福は、それを味識する者のみの知る所である。それを獨占してはならず、獨占すべきでないと思ふが故に、宗教の必要を説き、信仰の難有さを話しても、所謂縁

なき衆生か、耳を傾けざるが多いのは、情けない事と思ふのである。

學問をして迷ふ者が多くなつたり、智識階級と自他が許す者が殖へて煩悶する者が殖へたり、萬能の神であると認めらるゝ金に不自由のない者が不安に驅られたり、立派に仕事に従事しながら、それに立命の出來ぬ者があるのは、全く笑止千萬な事である。それにしても、學問の力の頼り少き事、智識が案外役に立たぬものである事、金の價値の少い事、就職の頼み難い事を知らねばならぬと同時に、人は畢意何を恃むべきや、何に信賴すべきやに考慮し、それを求むる心に醒めねばならぬのである。弱者は人以上のものを認めてそれに一切をゆだねる事になるであらう、強い者は自己を頼む事に目醒めて自己を頼む様になるであらう。其處に宗教的生活が起り、宗教的生活の必要が認識されて、宗敎生活に入る事が出來るのである。農民は教育に恵まれず物質的にも氣の毒な境遇に置かれて居るが多いのである。而も彼等の中には晏如として心安らかに日暮らしをするものがあり、農民の使命を果たす事に汲々乎として、而



も朗かに働くもある。愛知縣の篤農家に館助左衛門と云ふがあつた、大日本農會の總裁宮殿下から表彰され、知事からも表彰された人で愛知縣農界の恩人であるが、何時も粗食粗衣に甘んじて、唯農事に精勵努力し、研究工夫に燃へて居つた爲めに、誰も氣付かぬ事を敢てし、何時も金に恵まれた者であるが、貰ふた金は本願寺に寄附し、取つた金は社會に推讓して難有い／＼と口癖にして居つた。故井上友一氏が面接して其功績を嘆美したのに對し、何事も佛法様の御影で、南無阿彌陀佛／＼と連呼したので、井上氏が面喰つたと云ふ逸話もあるが、見るから羨ましい程、安心立命の境地に立つて居つた者である。故に宗教に目醒め、信仰に生きる者は幸であるとせざるを得ぬのである。恵まれざる境遇に立つ者は、宗教に目醒めて落付て働く事が出来るのであり、信仰に生きて精進が出来るが故に、やがて恵まれる境地を開く事が出来る譯である。故に人のみを相手にして、不平を訴へたり、愚痴を云つたり、果ては怨嗟し呪咀し、鬭争によりて解決せむとするは、如何に巧緻を輸しても、徒に修羅の巷

を展開し、地獄の世界を招來するのみである。劍聖と稱へられてる宮本武藏は偉い人であつたが、衆寡敵せぬ仕合を申込まれ、先づれば人を制すと意氣込で、仕合の場所に赴く途中、武の神である八幡宮の社前を通り、何心なく社頭に武運長久を祈らむとして、はつと氣がつき、自己を頼む事を忘れて神を頼む心の情けない事を自分で叱り、仕合をして後出直し御挨拶を申上げますと告げて、仕合に臨むだと云ふが、神を認めて神を頼まぬ所に、武藏の信仰生活が偲ばれて面白くもあり、難有くもあるのである。昔、京都で棒手振り商をして居つた人があり、毎月二十五日には必ず北野の天満宮に參詣をする。雨が降らうが槍が降らうが、それを止めた事がないので、人も知る様になつたのである。毎月の行事に眞摯であるだけ、毎日の行事も眞面目にやるので、或日或人が其男に

心だに誠の道にかないなば

祈らすとても神や守らむ



と歌を讀むだ方は天神様であると聞いて居るが、お前の眞摯なやり方は天神様も御承知であらう、そんなに二十五日の參詣をせぬでも天神様はお守り被下だらうではないかと云つた所が、其男は即座に

心をば誠の道にかなはせて

守らずともわれは祈らむ

と答へ、相かはらず天神詣をしたとあるが、自己を頼む所に信仰生活があり、眞に神を認めての精進が出来るのである。故に宗教は人を強くし、信仰は人を眞執にし、怨まず、嘆かず、呪はず、落付て自己の力を認め、足らざれば力を養ひ、餘力があれば何處までも自己の力を恃む事が出来、敢然として進み、肅然として退き、毅然として守り晏然として止まる事が出来る様になるのである。故に事が繁くなればなる程、人は宗教に頼るが賢明であり、人が多くなればなる程、信仰に生きるが幸福であるのである。

由來、向上の一路をたどり、向上を現實にするが人に許された事である以上、人の以上に神を認め、佛を知つて、それに到達せむと努むるは、人類當然の道であるのである。故に人のみ認め、物にのみ囚はれて、廣い世界を狭くし、自由な世の中を不自由にするは、蓋し愚の骨頂であり、馬鹿げた事の限りであるのである。之れ敢て宗教的氣分を煽り、信仰生活の貴さ難有さを力説した所以であるのである。

#### 第五項 政治と政策

今日の政治は大衆を本位とすべきであり、大衆の生活安定をはかるが政治である。故に政治家は國民の多數が何であるかを知り、先づ多數國民の生活安定をはからねばならぬのである。我國の現状に於ては、同一職業に従事する多數の國民は、農民であるは、争ふべからざる事實である以上、農民の生活安定をはかるが、政治の要諦でなければならぬのである。如何なる國民でも、生活に悩む時、心の安定を喪ふて自棄に陥るは、洋の東西を別たぬ事である。國家として尤も恐るべき革命は昔も今も、國民



が生活に不安を感ずる時に發生するのである。衣服に事缺いても我慢が出来る、住宅がなくとも辛棒する、唯食糧が不足する時、何時でも民心は不安に陥るのである。故に昔は足食を以て八政の首としたのは當然の事である。而も食糧の生産を受持つ者は農民であり、農民が獨り食糧の充實に従事する者であれば、昔は重農の政治を行ふたものである。

農民は環境に支配されて、沈黙の民であり従順の民でもある。それ故に言論の時代になれば、動もすれば沈黙であるが故に其存在が閑却され、政治の上にも政策の上にも粗略にされ易いのである。我國の政治家は歐米に範を取つた爲めに、都市中心の政治を行ひ、市民の聲を聞いて政策を立てたのである。それがために都市のみ無暗に盛昌し、擴張されて農村は次第に疲弊する様になり、今日ではそれが國家に累を及ぼす様になつて來た事は、我政治の不當が然らしめたものと斷ずる外はないのである。

都市の血液を新にするも農村の人であり、強兵の素因も亦農民であるが故に、農民

は單に食糧生産者とのみ目すべきではないのである。我國家の政治家は多く農村出の人が多く、而も農村の事を閑却するは、彼等は農村の意義を解せず、國家と農村との關係を知らざるが爲めであるのである。それは學者も農村を理解せず、學校教育に於ても農村を知らしめず、教科書も都市を本位とするが故に、何人も農村を知る由がないからである。如斯して今日は農村が疲弊し、農家が困憊して、累を我國家に及ぼす事になり、初めて政治家が問題となるに至つた事は、我政治家の不明と云ふより外はないのである。

何時でも、國民の生命を保證するは農民であり、凡ての原料を供給するも亦農民であるが故に、農村の繁榮、農民の安定は、國家興隆の因であり、彌榮を招來する根元であるのである。故に生活の安定を期し、國家の泰平を招來するには、農村を振興し農民を安堵せしむるを以て政治の根本精神とせねばならぬのである。我國に於ては天皇のみは有司にその道理を理解せしむべく、政治家の覺醒を促すべく、自ら水田に



立たせ給ふ事は、全く恐懼の至りであるが、而も有司に悟るもの少く、政治家に目醒むる者のないは、情けない事の限りである。今度の議會に於て、米問題や繭の問題が論議されたが、徒に論議するばかりで、何の對策も見出す事が出来ないのは、我政治家や爲政者の怠慢であり醜態であるとせざるを得ぬのである。

農民の努力によりて、米があり餘る様になつた事は、國民が農民に感謝すべきである。非常時に際して食糧に餘り有るは、非常時の今日國民が安定する所以である。而も政治家の中には米の多收を呪ふがあり、爲政者にその措置に當惑するがあるは、笑止千萬の事である。農民は生産にいそしんで、自己の分擔を果せばよいのである。

何時でも農民が生産にいそしむ心を緊張せしめ、不斷の努力を敢行せしむる所に政治が存在せねばならぬのである。米を買上げる、專賣にする、穀貯藏せしむる等々は政治家がやるべき事であつて、農民は何時でも元氣よく生産にいそしめばよいのである。農民に其元氣と努力とを失はしめない様に、政治であり、政策でなければならぬ。

らぬのである。由來我國は、惟神道に於て歸一と分擔とを認める事に終始してゐるのであり、其處に我國の進展があり、國運の興隆を見るのである。軍人が忠誠を輸たして國防に遺憾なきを期し、農民が足食に忠實服業の誠を輸たすのに、政治家が自己の分擔に行詰るは以ての外のことである。

國民の生活を安定し、各自の分擔に最善を輸たさしめ、以て國家の興隆彌榮に貢献せしむるは、政治の要諦であり、支障を排し、各自の分擔に圓滿なる努力をなさしむる所に政策が樹立されねばならぬのである。其處に遺憾なき活動を敢てし、對策によりしきを得るが政治家の任務であり、爲政者の存在が認めらるゝ所以である。今日の如く社會不安が存在し、國民が生活に安定を望む能はずなりては、國民が政黨を信ぜず、政治家を認めずなるは、當然の歸決であるであらう。スローモーションと稱せらるゝ内閣が、倒れそうで倒れず、悪口は云つても絶縁はしても倒閣の舉に出づる能はざるは、我憲政の醜態であるが、政黨に信頼がなければどうする事も出来ぬのである。



然し、農民は不相變生産に努力しつゝあり、商工者は販路擴張に努めて、製品を世界の各地に進出せしめて居る。國防は數字的には危しと云ふと雖も、軍人の精銳に信頼して、國民は何等不安を感じずに居る。我國は如斯して不相變進展の歩をすゝめつゝあるは、我國體の賜であり、我國民性の貴い所以であるのである。故に政治が常道に立ちかへり、政策が確立せば、我國家の興隆は期して待つべきであると思へば、吾等は政治と政策とが、國民の信頼を得る様にと希はざるを得ぬのである。

繰りかへして云ふ、政治は國民の生活に基調を置くべきであり、政策は國民の生活脅威を排し、生活安定を保證する事であらねばならぬのである。時勢が變つても、人が變つても、物が變つても、國民が生活せねばならぬ事は變り様がないのである。何時でも、何處でも、國民は安定の生活を希望し、それに焦慮する以上は、政治は生活を離れて存在せず、政策も生活を離れて出来るものではないのである。それ故に政治家は生活問題を主とし、爲政者は國民の生活安定を期すべきであるのである。同時に

國民をして、生活の意義を理解せしめ、單に生活に意識せしめないで、生活の價値に意識せしめねばならぬのである。然らざれば、或は階級闘争に奔命したり、社會の秩序を亂だしても生活に執着するの弊に陥る事になる。吾等は飽くまでも生活を大切なりとするも、それが爲めに社會の秩序を亂したり、公安を損ふてはならぬのである。其處に政治的の工作が施されればならず、政策の妙諦も存在するのである。

社會が進んで來れば、生活様式が複雑になり、虛榮心が煽られ、競争が盛になる結果、何處でも生活難に陥るものが多くなる。人が多くなつて事業が伴はねば、失業者が出来易くなり、それが爲めに益生活難に陥る者が多くなる。今日文明國に於ての悩みはそれであり、文明の副産物はそれであるのである。それが爲めに一面に幸福を享有するものがあれば、一面に不幸を痛感する者が出来て、豫想を裏切る差別を生じ、社會不安が招來され、動もすれば國家の衰運が誘致されるのであるから、何處でもそれに對しての政治政策が緊切にして重大性を示すのである。然し英吉利の推移を見て



も、政府の力だけでは萬全を期する事が出来ぬ事を知る事が出来る以上、國民の生活に對する智識と節制とを喚起するが政治の上策であり、其處に政策を立つるが賢明であるのである。古より勤儉讓と訓て、社會の恩に對して推讓する事が稱導さるゝは、道德の項目と見るべきでなく、社會生活の安定を招來する唯一の道なりと觀すべきである。それ故に或は所得税が累進的になり、相續税が重くなり、暴利を取締る政策が出来て來るは、政治的工作として勿論必要であるが、寧ろ國民の生活意識によつて推讓に目醒めしむる事が、より有效であり、より賢明なる措置であるのである。政治上に於て斯る民風を作興し政策に於て斯る習慣を誘致する事が出来ないとすれば、或は共產主義の乗ずる所となり、或は直接行動を敢てする者が簇出して、社會を不安ならしむるばかりである。

政治の弊は、國民を政治の犠牲にする事であり、政策の弊は少數を擁護して多數の民衆を閑却する事である。政權の爭奪は政治家の生活としては面白い遊戯であらうけ

れども、國民の生活には没交渉である。資本家擁護の政策や、都市中心の政策は、政策であるに相違はないが、多數國民には有害無用のものである。故に政治が眞に國民の生活に直接し、政策が國民生活を改善する様にならねば、政治家の存在は國民より閑却され、果ては政黨を忌避する様にもなるは、蓋し已むを得ぬ事であらう。今日憲政の常道を踐む能はざる政界の狀態は、國民生活の指導を忽緒に附し、多數國民の生活を等閑に附した爲めであるのである。

最近の議會に於て、或は米問題や生糸の問題が論議されて、聊か政治が國民生活に直接して來た感じがしたのである。而も一時を塗糊するに過ぎずして、未だ根本政策として國民を納得せしむるに足るものが出来ぬのは、政治家や爲政者の爲めに憾まざるを得ぬのである。偶々調査會が成立したと見れば、感情に囚はれて其組織が思ふ様に出来ぬとは、不相變國民生活に對し眞剣でない事が表明さるゝばかりで、政治のため遺憾とせざるを得ぬのである。



要之、國民の生活指導に政治が役立たざる限り、國民は政治に興味を有たず、政治家をも信頼せず、政黨を重要視しないのである。従つて如何に憲政の常道は大切なりと雖も、常道に複する事は容易であるまいとする外はないのである。今日の國民は、業の如何を問はず、生活に意識し、生活に對して眞剣であるが故に、政治家の遊戯は許さぬのである。故に政治家も爲政者も、此處に明確なる自覺をせねばならず、生活に關する政策樹立に懸命の努力、眞摯なる研究をす、めねばならぬのである。即ち民をして各生活に安んぜしめ其業に落着かしむるが、政治であり政策でなければならぬのである。生産者は自己の分擔を守りて生業に従事すればよいのである。若し生産過剩に陥り、價格の低廉を來たして、生産者を脅威するならば、其處に政治的工作が必要となり、政策が立てられねばならぬのである。生産に對する保護政策、關稅政策等は政治家が案配すべきであり、爲政者が考慮すべきであるのである。此點が明確にならざる限り、政治と政策とに於て生活指導の精神を認識する事が出來ないのである。

生活指導の精神は教育によつて國民に理解せしめねばならず、それを理解せしむるが生きた教育であるのである。世が開らけ人智進んで生活難の聲が起り、生活苦を訴ふる者が簇出するは教育に於て生活指導の精神が闡明されなかつた爲めである。教育は神聖であるは勿論の事であるが、それに従事する教育家が俸給の不拂に遇ふて、餘儀なく盗心を起し、免職さるゝものが出て來た事は、眞に聖代の不祥事である。生活を閑却し、生活指導を忽緒に附し其精神に生くる能はざる者の最後は、斯る醜惡を暴露するが、蓋し當然の歸決である。故に今日心ある教育家は、小學校と中學校とを問はず、經濟更生の實習をなさしむる事に工夫し、或は職業的指導に遺憾なきを期すると同時に、消費節約の指導にも研究を進むる様になつて來たのは、我教育界の革正と目すべきである。生活を離れて人の活動はなく、人の活動は人類生活の進展向上をはかる外はないのである。生活問題をパンの問題として、之を蔑視したり下卑な事と解するは、やがて蔑視罵嘲を買ふものと覺悟すべきである。



## 第十七章 生活原理の闡明

生活を意識する以上は、生活の原理を固く把握せねばならぬのである。生活原理を把握せぬ爲めに、迷ふたり惑ふたり、苦しむだり困つたりするのである。世の中には現實に囚はれて原理の存在を知らぬがあり、知らうともせず、知らせようともせぬがある。文明を迎へた世の中に文明人と意識しながら、生活に悩むものがあり、生活難に陥つて生色なき者が輩出するのは、これが爲めであるのである。燈臺下暗しの諺は人の生活にも當はまるので、面白くもあり、笑止にも思はれるは、生活原理を把持する者の認識する所である。世に著書は極めて多く、意見の発表も亦耳を掩はねばならぬ程であるが、生活に關する著書が少く、之に關する纏つた意見の聞くべきがないのは生活の渦中に在るものが、生活に對する認識不足と云ふべきである。偶々生活を説

(234)

くもあるが、生活改善を論議するばかりで、未だ其原理を闡明する者が少いのは、眞に奇怪千萬である。吾輩は前述に於てそれとなく生活の意義と原理とを説示した譯であるが、思ふ所ありて、題目を新にして吾輩の所見を述べ、世人の注意を喚起せんとするのである。

### 第一項 勞働尊重

勤勞即生、懈怠即死は誰にも分る事であると信ずる實際死者は働かず、食はぬものであれば、生ある者は働くべきであり、食はねば生命を維持する事は出来ぬのである。それ故に生きる生命を活かすは、唯勤勞に在りと悟る事が出来、人間の活路は働く事であると知る事が出来る筈である。文明人は勞働を神聖なりと解するはそれが爲めであり、生活に目醒めた者が勞働を尊重するも亦同様であるのである。

現實に囚はれた者は、金さへあれば生活は容易なりと信ずる。故に生活に意識するは金の獲得に奔走し、凡百手段を弄しても金を得ん事に汲々乎として飽く事さへ知ら

(235)



ぬものがある。而も金持ち必ずしも生活安定ならず、物持必ずしも生活を禮讃する能はず、地主は必ずしも幸福なる生活を享有する者でない事は、世事に通ずる者であれば誰にも分る事であるであらう。金は畢竟労働によりて得べきものであり、それによらざる金は遺産にあらざる限り、不正不義のものと観ずべきである。今日は經濟思想が發達し經濟生活をせねばならぬ世の中になつたのであるが、學者は資本、勞力、土地を生産の三要素と教へてはよいが、動もすれば資本を尊重する事が、資本主義の世界を招來し、今や到處資本主義經濟に禍されて、資本を呪咀する者が現はれ、呪咀の聲が高くなつて來た事は、面白くもあり、淺間敷もあるのである。

神代の當時は論外とするも、人類は當初木の實を採食して生命を維持し、動物の生命を自己の生命にした事は學者が立證せずとも誰にも想像の出來る事である。遊牧の民が人多きを輸たして農業の民となつたにしろ、勤勞が生活を支配する事は、何處までも變らぬ事であり、如何なる者でも勞せずして、食にありつく事は出來なかつたの

である。物が多くなつた今日でも、原理は千變一律であつて變りやうがないのである。生活は勤勞によつて保證され、勤勞即生であるのである。故に人類は何處までも勤勞によつて生きる命を活かすべきであり、活かさねばならぬのである。其處に生活の原理が存在し、此原理を離れて生活は保證されないのである。

勤勞の貴い事に目醒め、勤勞尊重に意識する者は、物により金により動搖すべきではなく飽くまでも働き得らるゝ所に喜び、働き得る事に満足せねばならぬのである。金を得んとして働き、物に恵まれんとして働くは、未だ勤勞神聖に目醒めざるものであり、勤勞尊重に眞の意識がないものである。貴い勤勞を金錢で評價し、物質で代償するは餘りに勤勞の神聖を無視した事である。勤勞を金錢で見積り評價するが爲めに、勤勞賃が高くなり、生産費が高くなる。それは生產品の販路を縮少し、勤勞者の世界を狭くする所以である。勞銀の安い朝鮮の人は何處へでも進出する、支那の勞力は何處でも活動の天地を開拓しつつある。唯だ彼等は勤勞の神聖に目醒めず、勤勞尊重に



意識して斯くするのでないだけが、感<sup>あはれ</sup>じべきであるのである。生産費の安いために安  
價な日本製品は今や世界の凡ゆる市場に進出し文明國に大なる脅威を與へて居るは面  
白い現象であるのである。已むを得ず安く買らねばならぬのでは面白くないが、努力  
の結果生産費を低下して、世界の市場を占領する所に面白味があるのである。労働尊  
重に意識し、安い賃銀を問題とせず、活動の天地を開拓し、國境を超越する所に人類  
の飛躍が出来るのである。故に此生活原理に目醒むることが出来ず、徒に地位を望ん  
だり、俸給の高さを欲する者は不況不景氣の時でなくとも、就職難になり生活苦を嘗  
めねばならぬのである。同時に労働を忌避する者は、何處でも活動の境地在縮少され  
やがて生活難に陥るものと覺悟すべきである。

生きる命を活<sup>い</sup>かすには、何等かの業を持たねばならず、一切の業に共通の道は勤勞  
であることは、既説の通りである。其處に官業と民業との別があつても、働く者が歡  
迎され、労働を好愛する者は出身もすれば出世もするのである。此處に明確なる意識

がなく徒に労働の苦のみを知つて安<sup>あん</sup>逸<sup>いつ</sup>を希<sup>ねが</sup>ふ者は、食を他に乞はねばならぬことにな  
るか、然らざれば他を奪<sup>うば</sup>ふ様になるのである。世に乞食が絶へず盜賊が絶へないのは  
労働尊重に目醒めざる者が何時でも存在することが分るのである。

世には歡迎さるゝものと、存在が呪<sup>じゆ</sup>咀<sup>そ</sup>さるゝものがある。働くものは何時も與へ  
る立場に立つ者なれば、誰でも歡迎する。働かざる者は何處でも奪<sup>うば</sup>ふ者であれば必ず  
呪<sup>じゆ</sup>咀<sup>そ</sup>さるゝものである。世が進んで労働者の權利が認識さるゝと同時に資本家が動もす  
れば呪<sup>じゆ</sup>咀<sup>そ</sup>の標的になるは、それが爲めであるのである。故に労働者が資本家に對し徒  
に鬭争を事とするは、面白からぬ社會現象であるが、然し政治政策に於て労働尊重の  
施設をせぬのも亦面白からぬことである。

有産と無産とは其處に大なる溝がある、然し共に生活はせねばならぬのである。有  
産に對しての尊敬はそれが勤勞の結果であるからである。故に遺産相續によりて、徒  
手徒食するは生活原理として許すべからざる所である。同時に勤勞を敢てする者、勞



働に生きつゝある者が、生活に脅威を受くる如きことも亦あるべからざることである。如何に安い賃銀で働いても生活が出来る様にせねばならず、出来る様にならねばならぬのである。此處に今日の社會は大なる缺陷を曝露しつゝあり、其缺陷のために社會問題が簇出するのである。天下泰平は人類生活の理想であり、社會の安定は民族の社會理想である。而も今日は動もすれば理想が裏切られ易いのである。それは労働の神聖に意識しながら之を神聖にすることが出来る。労働尊重は叫ばれながら、之を現實にする事が出来ぬからである。今日は資本主義の世の中であるは事實である、然し資本家が跳梁を敢てする必要はないのである。有産者は生活資料に困らぬ立場に在るも事實である。然し有閑階級になる道理はないのである。同時に労働によりて世に立つ者が生活難を訴へたり、生活苦を嘗めねばならぬ道理は斷じてないのである。労働者が愉快に働き得る様に労働の難有さを味識する様に、社會意識が明かになり、組織が出来て、労働する者の生活が保證され、安定せざる限り、労働尊重の世の中は展開さ

れないのである。有産と無産とは差別があつても、共存同榮の社會を迎ふことは、労働尊重が現實にならぬ限り、空想となるばかりである。

如何に考へても、生活は働によりて保證されることであり、向上もするのであれば生活の安定と向上とを希ふ以上、何人も労働尊重に目醒めねばならず、目醒めしめねばならぬのである。教育に勤勞主義が採用されるもよい、道德に於ても勤勞主義が鼓吹されるは當然であるが、政治の上に今少し労働尊重の精神が認められ、政策の上にも之を現實にすることが出来ねばならぬのである。有産者は無産者のために遠慮し、無産者は働き得る立場を禮讚することが出来る様心懸けねばならぬのである。労働尊重は口念佛に倣ふべきものではない。題目の唱呼によりて功德が表はるべきものでもない。社會生活の上にそれが權威を示し、難有さが味識されねばならぬのであり、それは人類共同の力によりて解決されべきことであるのである。これ、敢て労働尊重を絶叫しこれが生活原理であることを提唱する所以であるのである。



## 第二項 相互扶助

種の保存は天命であり、其彌榮をはかるは天道である。それには男女の相互扶助が絶対に必要であり、雌雄の存在が必然のものである。其當然の結果として親子が出來、兄弟姉妹が出來る、同一の生命を有する關係に於て目的を有する意味に於て彼等は相互扶助をなすべきであり、なさねばならぬ立場を有するのである。家の繁榮は家族の輯睦しじむくに待つべきであり、家族の幸福は圓滿なる家庭によつて招來されるとするは、何處でもかわらぬことである。それが擴張され、進展すれば、同じ村の者、同じ町の人、人は相互扶助に目醒めて初めて平和なる社會を迎ふることが出來ると悟らるべきである。更に之を擴大すれば同一の民族は相互扶助をすべきであり、同一の民族でなくとも世界の平和を求め人類の幸福を希望する者は相互扶助をせねばならぬ譯である。國際間の親善と云ふも、畢竟國と國との相互扶助に外ならぬのである。

聖徳太子が憲法十七條を制定し給ふた時、第一條に以和爲貴と明示されたのは、相

互扶助の必要を悟らせ給ふ御思召であつたと拜察するのである。今日は何處でも共同の精神が鼓吹こすいされ誰でも共同一致の功德くどくを説くも亦相互扶助を目的とするものである。釋迦は

五指之交彈、不如一擧擊

と説いて居るが、何人にも分り易く悟り易く共同の必要を知らしめ、相互扶助の心得を教へたものである。孟子は

天の時は地の利に如かず

地の利は人の和に如かず

と説いたのも指導者の着眼が何處でも同じであることが分るのである。

人は共同の必要を知つて其方法を知らぬ憾があり、其功德を悟つてそれに到達する道を辨わきまへぬ弊がある。共同を説いて共同團體の活動が思はしからず、相互扶助を計つて其實の上がらざるは、それが爲めであることを悟らねばならぬのである。文明人が



衆議を重んずるのも萬機公論ばんきこうろんに決する訓練をするのも、其處を思へばであるのである。五指が一擧になるには五本の指が折れねばならず、折らねばならぬのである。己が主張を固執こしつするもよいが、衆議が決すれば、心持よく己が主張を徹廢する雅量がなければならず、其處に犠牲の精神が働かねばならぬのである。即ち我執を去り、私情を棄て、皆と一致協力する心得がなければならぬのである。換言すれば、我が折れ我を折つて、始めて萬機公論に決することも出来れば、共同の實を上げることが出来、相倚り相扶け、自他共に同榮の道を歩むことが出来るのである。

知つて之を行ふ術を知らず、明に辨じて尙且つ行ふ方法を知らざるが、世には極めて多いのである。世が開らけ人智進んで何人も理窟に満足せぬ様になり、説諭だけでは承知せぬ様になる。之れ社會事業が提唱され、其施設が流布し、共存同榮の方法が奨励され助成さるゝ所以である。

今日は各職業に應じて共同團體が組織される様になり、農業者は農會を、商人は商

業會議所を、工人は工業俱樂部を有つ、それは同業者が相互扶助をなさんが爲めである。個人の力で萬事を解決するは容易のことではない、それ故に共同の力を以て個人の力の及ばざる所を解決し、以て福利を均霑おんぜんせんとするのである。作ることのみ没頭ぼつとうして商的經營に目醒ざりし農民は、長く商人の好餌となつてあつた。勤勞する者の生産が、不勞者に搾取さくしゆされて居つたのである。悟下ごかの阿蒙あまうでない農民は其愚を悟り、産業組合法によりて産業組合を組織し、相互扶助の實を擧げんとし、今や悔るべからざる勢を馴致する様になつて來たのは、蓋し蔽ふべからざる事實である。都市の中小商工業者が悲鳴を上げて、所謂反産運動を起す様になつた位である。搾取が出来なくなつたのは氣の毒であるが、智的に、財的にも弱い農民が、相互扶助に目醒めて自衛の道を講ずるは己むを得ぬ状態であるのである。近來、産業組合が利用組合の事業として病院の經營を始めつゝあり、それに伴ふて醫者が困つて居る所がある。然し世の中は長く藥九層倍の暴利を許さず、醫藥に恵まれなかつた農村の人が、相互扶助に目醒



めて病院の經營を敢てするは、農民自覺の表現と見る外はないのである。長い間一般の農山漁村の人は生産物の保管に苦しみ、投げ賣りを餘儀なくされたり、商人に買収されて利益を逃がしたのであるが、近來或は農業倉庫、或は木炭倉庫、或は漁業倉庫を建て、相互扶助の實が上らる様になつたのは、著しい農山漁村民の自覺である。如斯して産業的に、經濟的に農山漁村の人が覺醒して、相互扶助に凡ての方法を講究し採用し、利用するは、農山漁村の人の進歩であり、向上であるのである。彼等が社會生活の眞諦に目醒め、共同生活の功德を味識するに至つたのであるから、如何に阻止せんとしても駄目であるのである。故に商工者が營業の方針を改め、方法を革めざる限り、生産者全體の相互扶助が出来ず、共存同榮の社會理想は實現しないのである。

朝鮮の農民は徹底的に貧乏して居る、想像も及ばぬ貧乏さであるが、彼等が相互扶助に目醒め、或は振興會、或は改良組合、或は郷約、或は契などを組織して、今や局面展開の實を上げつゝあるは、面白い現象であるのである。毎日炊く米の中から一

サジ宛米をよける、個人であれば箸にも棒にもならぬ少額であるが、數人、數十人の分を合はせば相當の額になる、之れを金に代へて鶏を買つたり、豚を買ふ。其利益を積んで牛を買ふ、土地を借入れ、其利益によりて、土地を買ふ、子供を學校に出す、織機を購入して機業を始める。如斯して、一面に餘剩勞力が消化され、一面に生産が進んで、財的に恵まれ、教育的に進出し、生活の向上をはかり、今更ながら相互扶助の功德を味識しつゝあるは、總督政治の一大進歩であると好評を博しつゝあるのである。従來、朝鮮では便所を有たず、濫突おんぞつからかき出した灰の上に大便をしたものである。故に糞尿の利用は出来なく、衛生上亦默殺することが出来なかつたのである。また朝鮮の人は入浴せぬ習慣であり、洗濯は衣物ばかりであつたが爲めに、不潔は免れぬことであつた。また所によつては、婦人の野外勞働は絶無であり、婦人は職業に従事せぬものと解釋されて居つた。これが共同團體の組織により相互扶助の自覺により今や面白い程改良されつゝあるは、朝鮮に於ては隔世的の變化であるのである。今日



は共同の利益によつて便所が到處に出來、共同風呂が出來、婦人の農耕に従事する者が彼處此處に見らるゝ様になつて來たのである。加之、朝鮮には文盲が多く、文字を解せず、數字を數ふることも出來ぬものが多數であつたが、今日は到處に簡易學校を設立したり、公會堂や集會所を建て、夜學を始め、文盲退治の民風が全鮮的になつて來たことは驚くべき勢であるのである。

何處でも、弱い者、愚な者、貧しき者が多數を占むるものであり、それが社會に厄介をかけるものであるが、彼等を救濟する唯一の道も、彼等が自助的に向上する一路も、相互扶助に目醒め、共同の力を利用せしめ、利用するに限るのである。小を積んで大となし、少を集めて多とするは、唯だ共同に如くはないのである。其處に相互扶助の精神が基調となり、共同輯睦の妙味が理解され、和衷の功德が分つて居れば、明るい幸福なる境地を開らくことが出来るのである。人類の社會は如斯して共存同榮すべきであり、福利の均霑を計るべきであるのである。

君子和而不同、少人同而不和と誠しめてあるが、吾等はそれを明確に認識せねばならぬのである。社會の福祉を招來するために、私情を棄て、我執を去りて協力一致、一心同體を敢てするは和である。麻雀が好きであるので一所になり、酒を飲むものが集り、酒色に興味を持つものが連れ立つて青樓に登るが如きは同である。和と同とは形が似て居るが其處に氷炭の差があり、黑白の別がある。多くの人は同じ易いが、和し難い弱點を持つて居り、趣味によりて一所になるが、利によつて分るゝ缺點を持つて居る。和の實現とは犠牲の精神が根底でなければならぬのである、故に一度組合員となつた以上は、一時の損失をしても組合の約束を破るべきではない。一時の苦痛は嘗めても會規は背くべきではないのである。團體訓練の必要、組合精神の鼓吹は其處を考慮するからである。身命を國家にさしげ 天皇にさしげた軍人は、よく共同もすれば、團結もする。命令一下、火の中へでも水の中へでも飛び込むのである。主義に生きる者同志の結束も固い、彼等は主義のためには、身命を棄て、辭せないのであ



る。故に小我を棄て、大我に生きることに目醒めざる限り、眞の和は望むべし、もないのである。小人は同に惰して、相互扶助の功德に浴することも出来なければ、相互扶助の難有さを味識することも出来ぬのである。

勤勞の功德を擴大するは、相互扶助に目醒めて和を全ふことにあり、和を全ふする所に勤勞尊重の功德が發揚するのである。相互扶助のない所には、働き損の草疲れ儲けの嘆があり、稼き貧乏の憾があり、骨折つて叱かられる小僧と兄弟分になる恐がある。吾等は飽くまでも分擔を認め、分擔に最善を盡くすの覺悟はなければならぬが歸一する所に社會生活の原理を遺憾なく發揚することが出来るのである。個人の全能力を發揮せねばならぬが、それだけでは社會生活に遺憾なきを期し難いのである。世が進んで事が複雑になればなる程、人多くなりて競争が激しくなればなる程、吾等は個人の力の少なるを意識する機會が多いのである。個人の力は神を頼むよりも、佛を祈るよりも、まづ共同し、協力し、相互扶助を敢てせねばならぬのである。天は自から

助くる者を助くとあるが、個人の力を合はせ、各人の力を纏めて、以て力の擴大をはかる所に天助があり、其處に目醒めての施設をする所に天裕を悟る事が出来るのである。吾等は飽くまでも生活原理を囚へねばならず、生活原理によつて生活の進展と向上とを計らねばならぬのである。治者の政策によりて生活が保證され、生活の安定を得た時代は、既に過去になつたのである。今日は民衆の自覺によつて生活の安定と向上とを計らねばならぬので、政策はそれを助成するものと思はねばならぬのである。即ち官民が一致し共同して、以て社會生活を進展させ、向上させねばならぬのである。それには吾等は正に生活原理を早く、固く把持して、迷ふ所なく惑ふ所なく、勇往邁進せねばならぬのである。今日は生活に意識する者徒に多くなり、其原理を闡明にし原理を把持して善處するものが比較的少いのは、生活其ものが社會問題になる所以ではあるまいかと思ふ。これ吾等特に生活原理の闡明を提唱する所以であり、凡ての人をして其原理に通せしめんとする所以でもあるのである。



## 第十八章 生活様式

大體に於て、孰れの國に於ても其國固有の生活様式が出来て居る、民族は其様式によりて區別さるゝ程、違つた様式が認めらるゝのである。世界に於ける生活様式は之を三大別することが出来様と思ふ、然し野蠻人の生活は考慮する必要はあるまいと思ふから、之は問題外とする。衣服よりすれば西洋は共通のものが多く、支那と日本とは各違つたものを持つて居る。食物よりすれば肉食と菜食とに偏るがあり、肉菜兩様のものがある。住宅よりすれば、石造、土造、木造とがあるのである。然し、尤も複雑であり、趣味的のものは日本に限る様である。これだけ日本人は、生活様式に付て検討すべきであり、考慮すべきであり、其處に多くの問題があるのである。誰でも今日は我國の生活様式が複雑であることを知つて居るが、然しこれを如何にするかに

付ては、尙思案投首の状態である様である。

### 第一項 氣候と生活

生活は氣候に支配さるゝことが極めて多い、寒い所では今尙穴居の生活が維持されて居る。暑い所では裸に近い生活が餘儀なくされるのである。彼處には脂濃い食物が必要とされて、此處には果實の如き淡泊なものが好愛されて居る。然し何處でも、文明の程度が進んで來れば、寒い所でも暑い所でも、生活が複雑になつて來、消費が多くなつて來るは共通であるのである。

我國は溫帯に屬するので、暑さの用意もせねばならず、寒い時の準備もせねばならぬので、之れだけでも生活は複雑になり易いのである。それに我國の文化は、印度に則つたことがあり、支那を學んだことがあり、近來は西洋に擬似することになつたので、世界には珍しい生活の複雑化を認めらるゝのは、幸か不幸かは別問題として、現實のことであるは間違はぬことであるのである。



特に二千五百年の歴史を有するが故に新らしい國家に見ることの出来ぬ趣味的の生活があり、歴史的の生活もあるので、他の民族の生活に比して複雑であるのである。それは我國の特徴であり、己むを得ぬ様式であるとするを許さぬ様になつて來たのは、蓋し時勢の力と認めねばならぬのである。餘計なことはするでない。贅澤はすべきでないとするは、今も昔もかはらぬ處世訓である。それ改に、當年社會の上位に在りし武士の間には、三具と稱して一に曰く家具、二に曰く客具、三に曰く武具之だけの用意があれば足れりと教へたものである。家具は家族の生活に要するものであり、客具は客の接待に必要なものであり、武具は武士の使命を果たすになければならぬものである。故に農民であれば、家具、客具、農具を有つて居れば、農民としての生活は出来るもの、また出来ねばならぬとしたのである。二宮尊徳翁の如きは

飯と汁木綿着物は身を助く

其餘はわれをせむるものなり

と戒められたのである。また世間には

物足れば足るにまかせて物足らず

足らで物足る身こそ安けれ

とよんで、餘計なものを持つべきでない、餘計なものは持たぬに限ると教へたのである。それは世の進むにつれて人の慾望が増し、趣味が手傳ふて、奢侈しやしに流れ、贅澤ぜいたくに陥るが人情であるを看破しての教訓であるので、今日に於て更に適切なるを痛感するのである。明治維新以後は、四民並等となり、四海同胞の觀念が高まり、下の者は上の擬似をなし、自國の門を守る能はずして他國に則らんとする民風が興つて來た。特に歐米を先進國と認めたが故に、一から十まで歐米の風を進んだものと思ひ、誰彼の別なく、歐米の風を學ぶことになつたので、所謂二重三重の生活様式が認めらるゝ様になつたのは、己むを得ぬ時勢であるのである。

生産に従事する者は、需要者の要求に應せんとするのみならず、需要者の好奇心を



煽り購買力を高めんことに努むる結果、便利で誘ひ、珍らしいことで引つ張、優良なることで導き、安價で陥落せしむるのであるから、流行は激げしく變化することになり、未だ用を足すに差支なきものも、時勢後れのものとなれば用ゆる氣になれず、一つで用が足るものを、變つたものが出れば誰、も用ゐ度くなつて買足するのであるから、知らぬ間に道具が殖へ、何時とはなしに生活用具が多くなり、其置處に困ることなる。一面貧しき者は、それが出来ぬことに焦慮し、煩悶して不平を起したり、愚痴をこぼすことになる。故に温帯の我國に於ては寒國、暖國の様式が、時勢の進歩につれて交雜し複雑し、名狀すべからざる混亂に陥つて來たのである。

簡易生活の唱導は久しい事であり、生活改善も亦長い間の叫びである。然し冬の用意に加へて夏の用意をせねばならず、此間春と秋との用意もせねばならぬのであるから、我國の生活は簡易にすると雖ども、それは程度問題である。唯生活改善については、其處に多くのなすべきことがあり、社交儀禮に付ては尙更多くの改善する餘地が

あるのである。それは虚榮を排して質素を守ることによりて決行さるゝがあり、贅澤を斥けて簡易を貴ぶことによりて斷行さるゝがある。故に今日は何處でも教化運動により、社會改良の鼓吹こすいにより、質素、規律、陋習打破が試みられ、目醒めざめた所に在りては相當の成績を上げつゝあるは、何處までも助成すべきことであり、獎勵せねばならぬことである。

人情に厚いことは善良なる民風であり、風流を解するも亦ゆかしき民俗である。それが爲めに人を助けるはよいが、共倒れはすべきでないのである。春は花、夏は水、秋は紅葉、冬の雪景色を嘆美するは、我民族の趣味的生活である。氣候が馴致した民風であり、氣候が教へた民俗であるが、落花浪藉の醜態は排すべきであり、餘計な酒肴に財布を空にするは、何時でも馬鹿げたことであるのである。斯る所にも他に見られぬ生活様式があり、我國独自のものが存在するのである。會社や銀行や、工場や商店や、學校や官廳の人々が、花見を共にし、紅葉狩に興じ、平素の鬱を散ずるは、櫻



花を誇りとする國に於ては、あつて然るべきことであり、あるが當然のことである。然し狂態を演じ、醜狀を曝露するは、慎むべきであり、警しむべきことである。

我國は雨の比較的多い國である。それが爲めにも、雨の少い所に比して特別の様式があるのである。傘や下駄が發達したのはそれが爲めであり、家にヒサシが必要であり、部屋の暗いのも、それが爲めであるのである。雨の少い所は人を快潤にし、雨の多い所は人を重厚にする、氣候が人心に及ぼす影響や、民俗に輸たす感化は、侮るべからざるものがあり、従つて生活様式にも相違を來すのである。

如斯觀察すれば、氣候は生活様式を支配する力が強いものであり、吾等は氣候によりて違つた生活様式を有たねばならぬことが分るのである。氣候は變化すと云ふが多少の變化は誰にも認むることが出来る。北陸の雪は少くなつた様であり、東海の雨は多くなつた様である。朝鮮には三寒四温が規則正しくあつたものだが、今日は動もすればそれが亂れ勝になる傾向が見へて來た。朝鮮では氣候が内地化して來たと云つて

居るが、それは朝鮮ばかりではないのである。禿山が多かつた當時に比すれば林相が整ふて來た所では、氣候に變化を見、人口稀薄であつた所に人口が多くなればやはり氣候が變化する。既に氣候が變化する、それは徐々であるにしても、それが吾等の生活様式に變化を促すものであることを知らねばならぬのである。只さへ生活様式が複雑である所に、氣候の變化が及ぼす影響を思へば、吾等は何處までも其處に善處する覺悟がなければならぬと同時に、生活改善に最善の努力を敢てして、様式の質素簡易に工夫せねばならぬのである。吾等は生きる命を完全に活かして、以て生活價值を認識せしむればよいのである。萬物の靈長たるを自任する人類は、氣候を利用して面白く生活すべきであるが、生活様式の犠牲には斷じてなるべきではないのである。觀じ來れば、生活様式の異なる所に人生の妙趣があり、人類生活の妙味もある。然しそれがために悩み、苦しみ、悶へるは愚の極であり、恥辱でもあるのである。故に吾等は氣候を利用して、繁累を防ぐ生活様式を工夫し、貴賤、貧富による生活様式の差別を



なるべく徹廢することに努力せねばならぬのである。

多くの人は生活様式に制せられて苦惱をしてる傾向があり、氣候に對して愚痴を云ふ風潮があるは、情けないことの限りである。文明の世を迎へ、文明人と意識する今日の人は、氣候を利用して心持よい生活様式を創始する覺悟がなければならず、保存すべきは保存し、改廢すべきは斷乎として之を改廢することが出来ねばならぬのである。其處に明確なる觀念を有ち、其處に斷乎たる手段をとり、其處に面白い展開をするが、文明人であることを知らねばならぬのである。今日の人は餘りに氣候に征服されて居る。冬に夏の衣裳いしやうで通し、夏に冬の着物で我慢をする様な人は、殆んどなくなつた様である。氣候に制せらるゝ生活様式に囚はれて、それを脱出する様な氣概は見ることが出来なくなつた憾がある。文明は人を弱くするといふ諺は、本當であると思はしむるは、抑も人類の誇りであらうか、恥辱であるであらうかと、考へて見る人もなくなつたではないかと思はるゝのである。吾輩は由來生活様式に囚はれぬ積りであり

其處に吾輩の面目が存在してゐると思つて居る。それだけ今の人が氣候に制せられ、それによる生活様式に囚はるゝものゝ多いのを遺憾とするものである。これ特に生活様式を論じ、氣候と生活と題して、吾輩の所見を披瀝して、世人の注意を喚起し、氣候による生活様式に對する覺悟を促す所以である。

## 第二項 文明と生活

野蠻時代は差別が甚だしく、權力の下に統制されたものであるが故に、生活様式は上下によりて非常の差別があつたものである。權力を有する者は、權力を示さんために必要以上の生活資料を有ち、權威を維持せんが爲めに、下者の生活を犠牲にしたものである。それ故に當事に於ては、下者は何處でも必要の最低限度の生活をなし、上者には及ばぬものと觀念しあきらめたものである。

文明になりては平等の觀念が發達し、當年あきらめた連中は、意識を生活の上に明かにして、或は生活權を主張し、或は生存權を唱訴する様になり、凡ての者は必要以



上の生活資料を得んとし、従つて生活様式が複雑になるばかりであり、自ら生活上の惱を感ずる様になるは笑止の沙汰であるが、蓋し勢であるのである。

當時は社會の機構が不完全であり、差別が甚だしかつた爲めに、弱肉強食の現象が著しく、弱い者は氣の毒な状態に置かれたものである。食を十分得ずして倒れたり、衣を得る能はずして死んだり、雨露を凌ぐことが出来ないうで病没したり、健康に恵まれずして幼折したりするものが非常に多かつたものである。治安が維持されず、生命を貴ぶ觀念が發達せざりし爲めに、殺傷のために死んだものも多かつた。或は饑飢のために、流行病のために多くの人が倒れた例は何處でもあるのである。それ故に當時は何處でも、人口の増加が著しくなく、自然淘汰が行れた觀があつた。然るに文明になつて社會の機構が整備するや、衛生思想の發達、治安の維持、生産の進歩につれて生命の保全が出来る様になり、何處でも著しい人口の増加を招來しつゝあるのである。唯文明人は虚榮に囚はるゝ結果、産兒を制限する結果、人口の増加を人為的に制

限するものがあるが、それは變態と見做すべきであるのである。

文明は虚榮に人を誘導し、虚榮に走らす憾がある。洋の東西を問はず、之がために文明人の多くは必要以上の生活様式をなし、自ら生活苦を嘗めるものがある。文明人の横暴に對し、跳梁に對する天警、天罰は有産階級が生活様式によりて生活苦を嘗めることである。世が開られて來れば、便利に誘はれ、新奇に導かれ、良いと云ふことに囚はれ、流行に追はれて、所有慾が促され、使用慾が起り、必要不必要に無頓着となり、購買せんとする。それが爲めに有識階級が犯罪を敢てしたり、有閑階級が刑罰を受けることになるは、此處彼處に見らるゝ社會現象である。一面に於ては、生活に必要なものを得る能はざるがあり、生活の安定を得ず、生活の向上に憧憬して而もそれを得る希望が阻止さるゝものもある。之が爲めに、上下の間と文明を裏切り、文化を毒する鬭争が誘致されて、平和を理想としながら修羅の巷を招來する、淺間敷世相が展開されつゝあるは、如何に考へても情けないことの極みである。



戦は人生なりと覺悟すべきであり、戦によりて進歩すると思念すべきであるが、人類は其覺悟に生きて初めて戦を避けることが出来、其思念によりて進歩を現實にすることが出来るのである。戦は道理に依るものは何時でも勝つものであり、用意を周到にするものは常勝の榮譽を負ふものである。其處に意識するが文明人であり、其處に信念を持つが文明人の態度であるのである。文明人は何處でも人類の幸福、世界の平和を理想とすべきであるが故に、相互に犯されざる用意を爲し、乘ずる機會を作らぬ準備もせねばならぬのである。不戰條約が國際聯盟の間に結ばれて、それが役立たずなるは、人生の哲理に覺悟せざるが爲めであり、軍備縮少が國際間にもになりかけて、而もそれがものにならぬのも、不戰の眞理を思念せざるが爲めである。攻むべからざるものが用意されて居れば攻めるものはない筈であり、持つものが準備されて居れば天下に恐るゝものはないのである。戦はずして勝つは、古來兵法の奥儀であつてそれは社會生活の秘訣でもあるのである。資本家が人道に即して勞働者の人格を認め

其存在必要を知つて、勞働者を遇すれば、勞働者は資本家の權威を犯す者ではないのである。否犯さんと欲して犯すことが出来ないのである。貴い地位に立つ者が、其地位に反省して賤者を愛護し、同情の措置をとれば、賤者は斷じて貴い者を呪咀するものではないのである。同時に勞働者が勞働者の使命を守り、それを果さんことに努むれば、世間の同情は千萬の味方になるのであるから、資本家は侮蔑することは出来ぬのである。賤者は分を辨へ、其地位による役割を盡くすに忠實ならば、社會の嚴肅なる裁判がある以上、貴者の我儘なる振舞は出来ぬ譯である。如斯して社會は初めて闘争より離脱し、上下相和し、貴賤輯睦して、其處に平和なる天地が展開し、幸福なる境地が招來さるのである。文明人は此處に明確なる覺悟を持つべきであり、用意を周到にすべきである。

虚榮心は人には共通のものであり、勢に驅らるゝも亦人の通弊である。人が多くなり、物が豊になつて虚榮心が盛になり、勢に乘じ易くなるは、蓋し文明病である。今



日の人は賢くなつたと云ふと雖ども、上下を通じて虚榮心に驅られ、勢に乗ずる通弊より脱出することが出来ない憾がある。有産家、資本家はあるにまかせて、奢侈、贅澤の生活様式を取て採用する。それが無産者、労働者にあてこすりに見へ、如何にも他を馬鹿にする様にも考へらるゝのである。實際なくて困り、必要に迫られて必要の生活資料を得る能はず、従つて生活様式を整へることすら出来ぬものがあるのに、必要以上のものを整へ、なくてよいものまで所有し、自己の力によつて得たものであるにもせよ、他に憚る所なく、恐るゝ所もなく、自己満足に終始するは、宗教に於ても道德に於ても許さぬことである。無遠慮は文明人の惡癖であり、我儘は文明人の通弊であると観ずれば、其迄のことであるが、然し社會理想を裏切つて不安の境地を迎ふることは文明人としては餘りに馬鹿げたことであり、分別の足らぬことでもある。文明國の生活は錦布の如しと云ふが、全く其の様に見へる。見た所は立派であり、奇麗であり、樂土の様に見えるが、其裏面は醜汚であり、暗黒であるのである。トル

ストイは都會は不夜城の觀がある、それは都會生活者の心が暗くなつた證據であると説いて居るが、全く其通りであるのである。錦繡を纏ふて天女の如き者の心は、何時も暗黒であり、大厦高樓に浮き身をやつす者は、何處でも畜生根性であるが多いのである。物に恵まるゝもの多く心に恵まれず、物に富む者は大概心に貧しきは、今も昔もかはらぬことである。それ故に文明人と意識する者は、何人でも出来る生活様式を工夫せねばならぬのである、所謂文化的な生活様式が創造されねばならぬのである。見るだけでそこに到達することが出来ぬ生活様式は駄目である。誰でも不自由を感じず生活様式では尙更駄目である。饑を感じず、働くことの出来る様に食ひ、寒さ暑さを凌ぐことが出来、人に不快の念を起さぬ様に衣服の用意が出来、寢起に不便を感じず人に接するだけの餘地があれば、生活に必要なものが得られたものと観すべきである。其他に必要なものが澤山ある。そう感じて来るが文明人であるが、それは共同の施設によつて不足を充當する様にするがよいのである。文明國が社會事業を盛にし、



共存同榮の實現を輸たすべく種々の施設をするは、各人に共通の必需品を具備せんが爲めであり、有産無産の差別によつて生活様式に差別を生ぜしめぬが爲めである。ある者は提供し、ない者は勞力を提出し、何人にも必要なものは、共通に使用が出来る様にするは、社會事業が必要視さるゝ所以であり、其處に意識して生活様式を均等にせんとするが、文明人であるのである。

差別はあるが當然であり、差別を覺悟するが文明人であるが、然し平等を意識し、理想とする所に差別が認められるのである。平等を無視しての差別は、文明人の承服する能はざる所であるが故に、其處には鬭争が起り、破壊すら行はるゝ様になるのである。戰を覺悟して平和が迎へられ、平等を理念して差別が認容さるゝのである。生活様式は千種萬態しゆばんたいであるが、平等の觀念が明確であり、それに對する努力が認められて、人は生活様式の差別を餘儀なきものと觀念するのである。

文明は理念を追求し、意志を穿議して、形にのみ囚はれぬことになる。それ故に、

貧しきに同情する心が認められ、賤しきを侮らざる意志が分つて來れば、貴賤、貧富の別によりて生活様式が如何であらうとも、淺間敷社會現象は起らぬ様になり、社會事業の進捗につれて、共同生活の功德を味識することが出来る程、社會の不安は除かれ、危険は取り去らるゝのである。

文明は人の生活様式を複雑にするが、然し統制は出来る。生活様式に差別を甚だしくするが、其處に安定の道は開けて來る。唯それは理想の發達に伴ふべきことであり意志の進歩に待たねばならぬことである。其處に文明人は何時でも反省すべきであり自警を要するのである。世間には此反省を缺き、此自警を閑却するがある。それが甚だ多いのである。社會の不安が招來され、不祥事件が発生し、文明を汚毒する現象が絶へざるはそれが爲めであるのである。

生活様式は異なるが本質であり、其處に生活の妙味もあるのである。然しそれが爲めに生活難が甚だしくなり、生活苦を嘗めるものが多くなるは、文明を辱かしめるもの



であるが故に、吾等は其現象を防止することに努めねばならぬのである。それには生活に對する理念を進め必要以上の生活様式に囚はれざる觀念を高め、共同施設によつて生活の向上をはかる様にすが、文明人であるとする外はないのである。如何に考へても、文明になつて生活に苦しむ者が多くなるは、面白からぬことであり、文明人の面目潰である。其處に善處して生活の安定を得、生活を禮讚し、感謝の生活が出来様にすが、文明であらねばならず、それが文明人の努力でなければならぬのである。これ文明と生活と題し、文明人と意識する人々に對して敢て反省を促す所以である。

## 第十九章 生活戦

平和場裡へいわじやうらの戦は生活の上に猛烈に行はれ、黙々裡に激甚なる戦が普遍こゝろするは生活に關してある。之が爲めに傷き、倒れ、亡ぶる者は枚擧に暇あらずであり、苦しみ、悩み、悶ゆるものは、其處此處に無數である。文明は美名であるが、個中に行はるゝ戦は醜態しうたいであり、文明が齎らす利器は世を飾りつゝあるが、裏面の生活戦は人生を汚しつゝある。恐るべきは生活戦であり、而も避けんとして避くべからざるのも亦生活戦である。故に吾等は生活に意識すると同時に、生活戦に用意する所がなければならず、優勝の地位に立たざるも、劣敗者に伍せざるを期せねばならぬのである。

### 第一項 生存競争

人が殖へて來るは世界の大勢であり、物が多くなつて來るも亦時勢である。而も平



等を理想として差別が著しくなり、世事は進んで止まる所を知らずと雖ども、失業者が出来て来る。故に何人も世路の艱難を痛感し、處世の容易ならざるを詳知する。之が爲めに生存競争が起り、其禍中に投ずることが餘儀なくさるゝは、孰れの國に於ても同様である。

經濟生活が意識され、教育によつて人の能力が進んで来れば、何處でも誰でも、少量多效を念願し、其處に最善の工夫を凝らすは、勢己むを得ぬことである。それが爲めに有能者は認めらるゝも、低能者は認められずなり、有力者は處を得るも、無力者は排斥されるばかりであり、背景を有する者は存存が認められ、背景を有せざる者は認められずなる。其處に焦慮があり、苦闘が起り、惡戦が演出さるゝは、蓋し當然のことである。事急なれば兄弟相争ひ、友人と雖ども戦ひ、親類と云ふと雖ども攻撃を敢てする。況んや他人に於てをやである。如斯して今日は生存競争が激しく、何人も生活戦に離れ日も足らぬ有様であるは、淺間敷世相であるのである。

一面に共存同榮が鼓吹され、社會事業が勃興して来るが、一面に於ては生活戦が愈酷になつて、凡百作戦が展開さるゝのである。それ故に生活原理に目醒めねばならず生活に用意をせねばならぬのであるが、依他の風尙未だ退却せず、獨立自營の意氣を見る能はざるは笑止に堪へぬことであるが、哀れにも氣の毒な現象である。また學校教育の功德が過信され、不相變卒業證書が唯一の武器なりとする思想も未だ消解せず、到處に入學難が起り試験地獄を見るも、亦生存競争の激げしさを偲ばせる事實である。

卒業生の入學難は悲惨なものであり、社會問題とせねばならぬ様になつて来たのである。採用せんとする人數の數十倍、或は何百倍の應募者が殺倒し或は縁故をたどり、或は知己を依頼し、學校長も職員もそれに奔走盡力を敢てし、父子共にあらん限りの運動を敢てする光景は如何に生存競争の激甚なるかを雄辯に物語るものである。而も機會を囚へる者は少く採用の恩典に接する者が少いので、到處に高等遊民の群を見る



は如何にも情けないことであるが、如何することも出来ぬのである。給料は貰はぬでよい待遇は如何でもよい、職を興へて貰ひ度いと頼んで職にありつく者は、比較的賢い者である。自己を恃むに限る、自力に依りて活路を求めんと祖先傳來の職に落付て成名、成功を度外して、自ら活路を開く者は尤も賢い者であるのである。生存競争は人生の試練であり、人の賢愚を別つ裁判であると見れば、面白いことであるのである。然し、到處に落伍者が出来敗残者が輩出し、これ等の中には自暴自棄に陥りて、弱きは人の情に活きることばかり念願し、強きは世を怨み、他を呪ふて直接行動を敢てする者が出来、社會を不安に陥るは、困つたことであるのである。

都市の外貌は立派であり、美觀であるが、其裏面の醜汚は年を追ふて甚しきを加ふるばかりである。外貌の立派さは成功者の成功を表現し、美觀は勝利者の光榮を物語るものである。裏面の醜汚は落伍者の惨じめさを示すものであり、敗残者の哀れさを現すものであるが、其裏面は見るに忍びず、語るにも忍びぬものがあるのである。田

舎の者が都會の立派さに誘惑され、美觀に眩惑されて、都會熱に罹り、都會に出で、生存競争の渦中に投じて、落伍者となり敗残者となるは、宛然夏の燈火を慕ふて火中に身を焼く虫であるは見るも哀れな現象であるが、田園の人に其悟りが容易に開けぬは、餘りにも愚かなことであるのである。田園は寂しいには相違ないが、其處には温い人の情けがあり、隣保相助の美風も残つて居る。農業の經營が時勢につれて六つケ敷なり、其處にも生存競争が行はると雖ども、それは都會に比すべくもないのである。

農村に於ける生存競争は人口の増加に伴ふて激甚を加へて來るが故に、過剰人口の消化に道を開けば緩和されるのである。それ故に政治家や爲政者は、其處に移民政策を立てねばならず、民族の移動を計劃せねばならぬのである。同時に農村の人は過剰人口を始末すべく滿洲や朝鮮に出かけねばならず、進んでブラジルにもアルゼンチンにも雄飛すべきである。引込思案は生存競争を激げしくするばかりであり、愛郷の念



もよい加減にせねば郷士を修羅の巷に導くことになるのである。故に國策ありと云ふならば過剰人口の消化をはかるが第一義であり、國策樹立をするならば、移民計劃を斷行するに優るはないのである。隣邦滿洲國の獨立を援助すべき立場に在る我帝國は、土地の開発と資源の利用とに、我民族の大移民を敢行するは、一舉兩得の策であるを敢て提唱する者である。目下滿洲の治安も、朝鮮の治安も共に我國民が負擔して居る。軍隊の力によつてのみ治安を希ふは賢明の策ではない、我民族の自警が有力になれば、治安は自ら出来ることになる。滿洲國の獨立を機會に、我過剰人口の始末をつけ、生存競争を緩和するは、我國策でなければならず、我國策とすべきであるのである。今日の如く五百名の自衛移民を送るが如きは、試験と云はゞそれまでであるが、國策とする以上は凡る手段を講じて、移民の安定をはからねばならぬのである。吾輩は此點に關し尙國論が統一せぬことを甚だ遺憾とする者であり、政府が其處に努力を新にする能はざるを更に遺憾とする者である。

生存競争は多くの問題を提供するが、亦多くの問題を解決に誘くものである。吾等は生存競争に對する認識を進め、以て善處することに努めねばならぬのである。

### 第二項 優勝劣敗

生存競争が激甚になれば、其處には優勝劣敗の事實が顯著になり、弱肉強食の現象が露骨になつて來るは、何時でも、何處でも免れぬことである。成功するものと不成功に了るもの、優るものと劣るもの、勝つ者と負けるもの、其處此處に出來、而も差別の溝を深くするのである。貴賤貧富は、當年にあつては定まれる運命と觀ずることが出來たが、今日では不定のものになつたのである。驕る者久しからず、驕らざる者亦久しからずと云ふことは走馬燈の如く轉廻するが、今の世の中であるのである。一獲千金の好運を喜ぶ者がある半面に、槿花一朝の夢を嘆くがあり權勢は立つ鳥を落す力のあつた者が、一躍落羽枯して敗殘者となるもある。遺産は頼むに足らず、家格



は何の權威もなく、門地も糞にもならぬ今日の世は、優者の素質を有する者のみが生存競争を迎へて優勝の榮冠を得るのである。

今日の人は資本に重きを置き、資本家を優勝者と見るがある。それは誤解であり、<sup>ヒョウケン</sup>謬見であるとする。資本はなければならず、あるほど便利であり、なきにまざるは云ふまでもないが、資本は労働の結果であり、努力の結晶であるは、昔も今もかわらぬことである。それ故に吾等は資本を生み出す源を有たねばならず、資本を得る道は踐む覺悟をせねばならぬのである。金原明善翁は

肉體労働は資本を得る第一歩

精神的労働を加ふるが第二步

それに資本を加ふるが第三步

資本によつて資本を得るが第四步

徳によつて資本を得るが第五歩

であると説かれたが、全く其通りであると思ふのである。生存競争の渦中に生活する者は如上の道理を辨へて、自己を知りて踐むべき道は生存競争を迎へて困らぬ者であり、やがて優勝の地位に立ち得る者と悟るべきである。

吾輩は前述に於て、健康、賢明、堅實であらねばならぬことを明にしたが、優者の地位に立たんと欲すれば、先づ健康であらねばならぬのである。人一倍働いて他から認識されるものも、人の嫌忌する仕事を敢てして價値を認めらるものも、陰陽なく働いて人に重寶がらるものも、健康が第一義である。肉體労働で活き、資本に有りつくは、健康でなければならず、健康に優れてこれが出来るのである。如斯して熟練すれば、その爲めに能率が上り、成績がよくなり、報酬が餘計に與へらるることになる。更に智識が働らき、上手に巧みに仕事が出来れば、益存在價値が認められて、多くの報酬にありつくことが出来、生活に餘計なことをしなければ、生活費を償ふて餘ることになり、貯蓄も出来る様になる。肉的、智的の労働に金が手傳ふ様になれば益す働きが



擴張され進展して儲を多く上げ得る様にもなれば、利益を餘計にすることも出来、愈資本を得ることが出来る様になる。そうになると、所謂資本家となり、肉的に働かぬでも、智的に焦慮せぬでも、資本が働いて資本を得ることになる所謂有閑階級となり、生活に物質的脅威を受けずして我儘三昧で日を暮らすことが出来る様にもなる。然し成金が成金に陥落する例は乏しからずであるが故に、用心をせねば、用意を缺けば、何時墮落せぬとも限らず、陥落せぬとも限らぬは、資本家に共通の戒めである。それ故に人は堅實でなければならず、守る所に忠實で間違つたことをせず、信用を傷つけることをせぬことが肝要であるのである。信用が厚くなりそれに陰徳を積んで、人から敬慕され、渴仰される様になれば、資本に不自由せぬことになり、資本を自由にもすることが出来、肉的にも心的にも生活に安定が出来る上に、なさんと欲する所をなし得る様にもなる。之れ、吾輩が優勝の素質として、健、賢、堅の三ケン主義を唱ふる所以であり、生存競争の激甚を加ふる今日、三ケン主義に目醒めよと訓ゆる所

以でもあるのである。

劣敗者は全く惨めなものであり、敗残者は眞に氣の毒なものである。而も生存競争が甚だしくなれば、優勝劣敗の現象が露骨になつて、劣敗者が多くなり敗残者が殖へるばかりであるから、自他共に劣敗者にならぬ様、敗残者に陥らぬ用意と覺悟に生きねばならぬのである。それは生活原理に目醒めて、如何なる勞働をも敢てする覺悟に生きることであり、人一倍の勞働力を有つて如何なる勞働にも従事する用意に生きることである。心眼を開いて働くことの貴いことに意識し、如何なる勞働でも忌はぬ覺悟があれば、生存競争が如何に激しくなつて來ても、生活の路は必ず開けて來、優者の立場を確得する道が分り、其處に進むことも必ず出来るのである。生存競争を恐れる者は畢竟用意を缺く者であり、優勝劣敗に愚痴をこぼし、世の中を呪咀する者は、落伍者たり、敗残者たる運命を招く者と觀すべきである。それは若い者にとり特に注意すべきことであり、悟らねばならぬことであるのである。



遺産に依る者にあらざる限り、父母の援助を受ける者でない限り、何人も自己の力に頼らねばならぬのである。自ら食む事の外に家族を扶養するとなれば相當の職業を持ち、生活の安定に精進せねばならぬのである。即ち業道と家道とに遺憾なきを期し、恒産をも造る覺悟がなければならず、社會奉仕をもせねばならぬのであるから、尋常一様の努力では駄目である。此處に明朗なる意識を以て不斷の努力をしないものは劣敗者となり、敗殘者となるは當然の歸趨と觀すべきであるのである。吾輩は勞働の禮讚者であるが故に勞働尊重を繰り返す譯ではないが、何んと謂つても勞働尊重に目醒めて如何なる勞働をも敢行するてふ信念に生きる人は、最後の勝利者であり、優越の地位を獲得する者であると信ずる。働く者は自ら食ふことが出来、家族を扶養することも出来、社會に貢献することも出来る者であり、果ては永遠の生命を得る事業まで残すことが出来るのである。

吾輩は今年六十二歳を迎へて居る、而も東奔西走寧日なしである、此頃は内地と朝

鮮とを股にかけて驅馳して居る。到處に好意をさへげて呉れる者があるので、其好意を空ふしない様にと思ひ久しい前から他の好意を貯金にすることにして居る。それは自動車ごちきを御馳走された場合には其料金と思ふだけのものを貯金する。宿泊料を許してくれた場合は、宿賃に相當する分を貯金する。塵も埋れば山となる諺に漏れず、年を経れば相當の額となるが故に、其内から社會奉仕に彼處此處で寄附することにして居る人が助かり、事業が助成され新しい仕事が生れて来るから、其功德は大である。吾輩は多年の努力によつて今日は生活安定を得て居る、然しそんなことで満足は出来ぬので農民を造るべき神風義塾をも經營して居る。其上に人の好意を空ふせずしてこれを社會にさへげて居る。故に吾等は、生存競争に勝利を得た者と自ら信じて居る。今更他に援助を頼んだり、哀訴することは斷じてしない覺悟に生きて居る。子女を教育すれば、子孫に美田を残す必要はないと思ふが故に其處にも何の心配もせぬ。親類のためにも貢いだ、氣の毒な人々には學費を提供した、人の世話はしたが、人に迷惑を



かけた覺のない吾輩は、心に恐るべきもなければ、やましきこともない。吾輩は、斯る境地に立つ者こそ生活戦の勝利者であり、競争場裡の優勝者であると信ずる者である。吾輩は金よりも仕事を重んじ、小我を棄て、大我に生きんと努めつゝあるものである。其處に勝利を得る道が存在し、優勝の道理があると主張する者である。功名を求め、利益を追ふは、今人の陥り易い弊であり、未だ道に思念せざるものなりと斷ずる者である。

優勝劣敗が顯著となれる今日、劣敗の多いことは痛恨に堪へないことである。これ笑止の沙汰と知りながら、六十二年間の吾輩の體驗よりして、優勝を得るの道を認めたる點を述べた所以である。

### 第三項 正義の價值

生存競争が激げしくなればなる程、多くの人は所謂覇道を行かんとし、危険を冒がさんとするものである。優勝劣敗が露骨になれば無理をしても、非道を犯しても劣敗

者に位すまいとする虚言も方便なりと解し、邪道に陥るも亦餘儀なきこととするがある。故に智ある者は愚になると偽り、強きは弱きを奪ひ、他の弱點に乗じて事をなさんとする傾向は、年を経るにつれて曝露されつゝあるは、蓋し周知の事實である。霸道を踐むだ者が成功したり、危険を冒して名を成したり、悪事を敢てして立身出世をなす者を見れば、それを惻巧者と嘆賞し、賢い者と感服し、上手にやつたと評判するが故に目的の爲めに手段を撰ばぬ思想が、上下に擴充して、今日は始末に了へぬことになつた觀がするは、聖代の恨事であるのである。

政黨の巨頭でも財界知名の人でも、時が來れば裁ばかれて汚名を千載に流がすは、吾等の眼前に見せつけられてゐる。如何に巧緻を極めたりと雖ども、天知り、地知り人亦知るは古今一貫して易らざることである。吾輩は時は神なりと信じて居るが故に、時は尤も公平なる裁判を下すと唱へて居る。巧緻を極める者はよく塗り込んだ塗り物の様にはげることが遅いだけで、塗つたものなら、何時かはげるに定つて居る。



上手にやつても詐偽は、何時かは詐偽と分り、犯せる罪の輕重によりて處罰さるゝのである。法律で許しても道德が許さず、人が罰せぬでも天が罰するは、昔も今も變らぬことである。古人は、人多き時は天に勝ち、天定つて人に勝つと教へて居る。之亦古今一貫の眞理である。

一時を塗糊してよい氣になり、人を掠奪し搾取して成功を喜ぶ者が極めて多いが、其近視であるは感むべきである。其内には必ず年貢を納めねばならぬ時が到來し吐き出さねばならぬ場合がある。人は苦しむ時、大概常識を失ふ者であり、常道を踐むことが出來ぬ様になる。故に人は信仰を持つか、主義に生きるか、守る所がなければならぬと云ふのである。苦しい時に神を頼むと云ふが、それは弱者であるが悪い事ではない。手段を撰ぶ能はずして悪事を敢てし、凶事を犯かすは情けないことである。生活戦ほど人を迷はす事はないので、迷ふ者が多くなりて、社會は不安に爲るばかりである。生存競争が甚しくなれば、飾るもの胡麻かす者、擬似者が多くなりて、其眞偽は

分らぬ様になり、社會は混亂に陥るばかりである。優勝劣敗が盛になれば、宣傳が盛になり、廣告が巧みになり、非常手段が講ぜらるゝから是非の判断が出來難くなる結果社會は曖昧になるばかりである。然し正義の光は燦として輝き、其力は牢乎として抜くべからずである。而も正義を守るは容易のことではない、正義と主張するも亦尋常のことではない、まして正義に終始するに於てをやである。

孔子は言忠信行篤なれば蠻貊と雖ども吾往かんと説いて居るが、其孔子は生活苦に陥りて喪家の犬の如き境地に立つたことがある。而も毅然として信ずる所に従ふて進み、泰然として踐むべき道を行ふたのである。それは孔子にして始めて出來ることにあらず、正義に生くる者の態度であり。行爲であるのである。孟子の所謂富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はざるは、大丈夫にして始めて出來ることであると同様に、正義を守る者なれば出來ることである。南洲先生は名もいらず、金もいらず、命もいらぬと云ふ人は始末に困る者である。此始末に困る者でなくば、



天下の大事は托せぬと云はれて居るが、それも亦正義に生くる人であるのである。今日は何處でも信賴の出来る人を需めて居り、信用の出来る人を要望して居る、それは正義を守る人であり、正義に生くる人であるのである。故に正義の人は最後の勝利者であるは、昔も今も同様である所に、正義の價値が認めらるゝのである。

正義は馬鹿に見へる場合が多く、馬鹿にもされ易いのである。そこに多くの人の迷があり、惑がある。然し愚者必ずしも愚ならず、偉人は多く馬鹿に見ゆるとある。吾等は決して迷ふべきでなく、惑ふべきではない。人若し正義に生くる信念があれば、恐る所もなければ、恐るゝ者もない筈である。故に強い人は正義の人であり、勇往邁進の出来る人も亦正義の人である譯である。

人には間違があるものであり、過失も亦あるものである。神にあらず、佛にあらずる人間であれば、後悔することのあるは己むを得ぬことである。然し正義の人は必ず過を改め非を懺悔する。昔より神も佛も、懺悔は過去を精算するものと見做すのであ

るから、間違つたとて正義は傷つくべきでなく、過失をしたとて正義を疑ふべきではないのである。正義に生くる人は其處に悟る所あつて周章すべきでなく、心を勞すべきではないのである。

由來、大和民族は正義を尊び、之を愛したものである。大和魂は吾等に正義を守るべく命令し、正義に終始すべく指導をするのである。武士道も正義を守るに終始し、農民道も亦正義に生くるを本體として居る。故に我國が國際聯盟を離脱するも正義を重んじたからであり、滿洲國の獨立を援助するも正義を愛するからである。我が外交が常道に復したのも正義を意識したからであり、皇軍の向ふ所敵なしと云ふも、正義に敵することが出来ぬからである。如斯、觀じ來れば、吾等は正義を固執せねばならず、正義の價値の大なるに目醒めねばならぬのである。

生活戦が如何に激甚なりと雖ども、正義の武器は死守せねばならぬのである。生存競争が猛烈となり、優勝劣敗が顯著になつても、何處までも正義を固執せねばならぬ



のである。正義は吾等に最後の勝利を得せしめ、最善の境地を以て迎へるものであることを自他共に忘れてならぬことを此處に繰りかへすものである。

## 第二十章 結 論

生きる生命を安全に活かし、それを彌榮ならしむるは、人類共通の大道であり責務である。然し大道であるからとて、平々坦々たるを望むべきでなく、責務であるからとてそれが平等でない以上は、生活は人生に於ける永久の問題であり、苦勞の種でもあるのである。

世が開らけ人智が進んで、生活問題が論議され生活難に陥る者益す多く、生活に焦慮する者益す多きを加ふるは、蓋し當然の事である。然し當然の事なりとして看過すべき事ではなく、看過すべからざるが生活問題である以上、吾等は生活に對して、明確なる意識と賢明なる措置をとらねばならぬのである。此著は此意味に於て論述したるものである。而も、意餘りて筆之に伴はず、筆走りて文之に適はざる憾があるは、吾輩の最も遺憾とする所である。而も、家の光に連載したるを補綴した上に、自力更



生運動が盛になる今日なれば此點に付て俄に思付きを述べることにしたが、氣にくはぬ所のあるは己むを得ぬ事と斷念せざるを得ぬは、讀者に對して相すまぬと思ふがどうする事も出来ぬは吾輩の甚だ遺憾とする所である。

然し生と活とを區別して、生活の根本義を論じ得た事を、吾輩は聊か愉快とするものである。世間には生活を論ずる者多く、生活問題に付て意見を述ぶる者も亦多いが、然し生と活との相違を明かにし、生と活との相對性を説く者のなかりし事を、吾輩は不思議に思ふこと長い間であつた。遂に忙中の吾輩が筆を呵して、生活に就ての意見を天下に訴ふる機會に遭遇した事は、蓋し天意であるとする外はないのである。

書肆泰文館主人伊藤君は、名古屋の人であり、開店して今年が十年になるので十週年紀念の出版を仕度しとて、吾輩の著述を求められたのであるが吾輩は改めて筆をとるよりも生活を世に闡明する方がよいと信じ、家の光に掲げた舊作を補綴して版を新にする事を慫慂したのである、幸伊藤君が快諾し古瀬傳藏君の助力を得たので世に公

にすることが出来たのである。故に吾輩が此著を公にしたのは泰文館と古瀬君との賜である、此處に感謝せざるを得ぬのである。

然し愈々着手して見ると分量が極めて少ないので、二百頁以上は南船北馬の途中に新たに執筆したもので、吾輩としては相當努力を拂つたものであることを認めて貰はなければならぬ。

繰りかへして謂ふ、此著は想に於て見るべきものがある、而も組織と體裁とに意の盡さざる所のあるは、吾輩の遺憾とする所であるが、之を検討して修飾するに暇なき吾輩の身上を憐む外はないのである。然し之によつて世間の人が聊かなりとも、生活に意識し、人生を「あな面白、あな手伸、あなさやけ、をけ」たらしむるを得ば、吾輩の本懐之に過ぎたるはなしである。吾輩は人生を何處までも、明るく、面白くし、楽しくする事を念願するものである。生を人にうけながら、人生を呪ふたり、怨んだりするは絶對にあるべからざる事と主張する者である。吾輩は此念願、信仰の上に立



脚して、此著を公にした事を讀者に敢て訴ふる者である。希くは凡ゆる民族、あらゆる人類は、盡く人生の幸福を喜び人生を感謝するに至らんことを。(了)

昭和九年六月十日 印刷  
昭和九年六月十四日 發行

定價金一圓五十錢		著者	山崎延吉
發行者		東京市神田區小川町三ノ二四 合資會社泰文館代表者	
印刷者		東京市神田區神保町三ノ二一 堀部 鎮	
發行所		東京市神田區小川町三ノ二四 合資會社泰文館 電話神田四四九六番 振替東京六七六〇三番	

泰文館印刷所發行



# 泰文館發行圖書目錄拔萃

(圖書目錄御申越次第進呈)

山崎延吉先生著 好評十六版

## 農村計劃

四六版クロー  
上製箱入美本  
定價金二圓也  
送料十二圓也

國家は十億に近き巨額の資金を投じて都市計劃を敢行すべく、それら準備中である。然るに五百五十萬の戸口を有する農村の幸福のためには、殆んどなんの計劃もなされぬ。然るに政府が小教の都會居住者の幸福を中心とした都市計劃にのみ力を注ぎ、農村計劃を無視してゐるがために、今日の農村計劃が樹立して國が起つて來たのである。著者山崎延吉先生は、農村計劃の社會的意義を論じ、都市生活者と農村の基礎を要すべき珍書である。

山崎延吉先生 共著 好評四版

## 農村の全村學校

四六判クロー  
上製箱入美本  
定價金二圓五十錢  
送料十四錢

文部省令に依る日本の教育は外形ばかりの教育であつて、内形即ち心の教育でない。此の點に多くの物足りなさがあるので、近頃精神教育……人物教育を中心とした私立學校が設けられたり、或は新式の教育方法が行はれるやうになつた。

本書の標題とする全村學校もその内の最も特色のあるもので、全村を單位とした人間教育の方法であつて、最近各地に開校されて其効果を認められ、農村の教育に一大爆彈を投じたものである。

直接教育事業に従事して居ると否とに拘らず、苟も人間教育に心あるものの一讀しなればならぬ名著である。



山崎延吉先生著 好評七版

# 村民訓

四六版クロース  
箱入上製美本  
定價金一圓五十錢  
送料十錢

今や農民は極度に困憊し、文明も墮落して社會も行詰る、これ都會偏重の結果である。茲に町村の振興のみが救國の大眼目たらんとする時に當り、曩に御進講の榮を擔へる農家の權威山崎先生は時世を深憂して『村民訓』を公にせらる。正にこれ旱天の慈雨、面も先生に於てこそ最過者、村民のために心をためて書かれたる、この名玉篇は、人に、村に、生命と自治との道を説いて、儒夫をも起たしむる慈父の言葉であり、經世の大識見による一家、一村の經營訓であり、繁榮の方法書、興村の羅針盤である。

山崎延吉先生著 御前進講記念出版 好評九版

# 農道説語

四六版クロース  
上製箱入美本  
定價金一圓五十錢  
送料十錢

農業經營については、術と法と道の三つを完備することが必要である。而して今日迄の農業指導者は農作物栽培の術、家畜類の飼育に關する所謂飼育の術と、資本、土地努力の組合せ少費多獲の經營法については殆ど至れり盡せり之域に達して居るのであるが、然し今迄に道を説いたものは殆どない。栽培の術や經營の法が如何に進歩發達しても、之れを栽培したり飼育する人が天道や人道に背いた術と法であつては決して農業は成り立つものではない。農國の本大精神を樹立し之れを徹底せしむるには、農民は如何にして生活すべきか、進むべきか、世に處すべきか、所謂農道を説く必要ありとして南船北馬、日本内地は勿論、民地の津々浦々に至るまで農道を説くこと卅年、遂に至誠天聽にまで達することの出来たのである。指導者は勿論、四千萬の農民全部は是非共一讀しなればならぬ名著である。

山崎延吉先生著 好評六版

# 世に立つ道

四六版クロース  
上製函入美本  
定價金一圓五十錢  
送料十錢

本書は山崎先生が、その深き省察と、高き人格と、長い經驗とから、世に立つ道の眞髓を説いたもので、殊に全國に亘り、成功し成名せる、百有余の篤農家、及び技術員、人格者等の實例に重きを置き、涙と感激を以て、その歩める成功の道を明にせし所の、全く他に類例のない處世の活教訓であり成功農家の貴い立志傳である。故に本書は、困憊せる農村にあつて、如何に世に處し、如何に成功を計らんかとする者に對し、最善の教師であり、鞭であり、光明の燈台である、されば起死回生の秘藥として、これを全國農民に洩れなく、切に熟讀を勵める所以である、希くは本書によつて前途を打開し、明日の幸福な家と村を建てられよ。

山崎延吉先生著 好評八版

# 齊家の葉

四六版クロース  
上製箱入美本  
定價金一圓五十錢  
送料十錢

「齊家」とは云ふ迄もなく家をおさめることである。故に「齊家の葉」とは家をおさめるしほり、即ち家政の指導の意味である。本書の著者山崎先生は農業教育、農民教育、農村教育に關する先覺者とし又恩人としての第一人者であり、町村自治の創設者として人の知る所であるが、此等の總ての教育指導の根本即ち基礎問題は先づ各人が町村、國家、社會の組織分子の一因子である各個人とその家をおさめることにありと云ふので、齊家の道に就てあらゆる方面より説き來り説き去つたもので、一家の主人、主婦、青年、處女は勿論、學者も、何人も一度本書を手に入れば自然に端座し襟を正さずして讀む事の出来ない修身書である。







著名の決解總 題問村農 望待

あらゆる更生計劃書を突破してエポック・メイキングの著成る

永井拓相題字  
石田傳吉氏著  
最新刊

農村問題解決の神髓

原稿五百枚  
寫眞多種  
上製函入美本  
壹圓八十錢  
送料十錢

現 内閣總理大臣齋藤實閣下に奉る書

農村問題の解決と云ふ題目は極めて新しい問題の様であつて、又頗る古い題目で今尚、解決の着かぬ問題である。「歸去來兮、田園將蕪、胡不歸」と彼の陶淵明の歸去來の辭を讀んだ誰か忘れ得ない名句である。親父が一杯やると毎時も口癖の様に朗吟する句でもあつたことを想起する著者にとつては極めて想ひ出の多い詩である。そうして今は又、農村問題に終始してゐる著者は、昨今、猶々たる農民生活の貧乏を訴へた通信を手にする時、眼に涙して讀に堪へない悲痛が供なう。本書は今尚、未解決の農村問題は何うなる可きか、と悩む、此難問を願ふ明決に解決した。農村農家の指導書である。著者は空論を採らない、又保守頑迷論を排する計劃の立案を教へた官民共通の教科書である。著者は空論を採らない、又保守頑迷論を排すると共に毛唐の受賣論を唾棄する眞新の尊徳宗で新日本主義者である。内容概目  
○第一編は農村復興論。第二編は思想及國教社會各論。第三編は米穀及蠶糸論。第四編は國策改造概論。第五編は經濟更生計劃。即町村是論以上五編廿九章は何れも金玉の文字。  
高邁なる著者の識見は全紙面に溢れ躍動してゐる、非常時に處する國士の憂國の指標である取て憂國愛郷の士に一本を薦める。

あらゆる點に涉りて更生計劃の立案及參考資料網羅さる

館文泰 町川小・田神・京東 三〇六七六京東替振 所行發

村田字一郎氏著

報徳 仕法 農村更生の道

四六版上製函入美本  
定價金一圓三十錢  
送料十錢

報徳仕法 農村更生の道  
著者 村田字一郎  
序 農村の現状と其の將來  
第一章 農村の歴史  
第二章 農村の地理  
第三章 農村の人口  
第四章 農村の産業  
第五章 農村の交通  
第六章 農村の教育  
第七章 農村の衛生  
第八章 農村の福利  
第九章 農村の政治  
第十章 農村の文化  
第十一章 農村の宗教  
第十二章 農村の風俗  
第十三章 農村の習慣  
第十四章 農村の法律  
第十五章 農村の行政  
第十六章 農村の司法  
第十七章 農村の警察  
第十八章 農村の消防  
第十九章 農村の保健  
第二十章 農村の福利  
第二十一章 農村の教育  
第二十二章 農村の衛生  
第二十三章 農村の福利  
第二十四章 農村の政治  
第二十五章 農村の文化  
第二十六章 農村の宗教  
第二十七章 農村の風俗  
第二十八章 農村の習慣  
第二十九章 農村の法律  
第三十章 農村の行政  
第三十一章 農村の司法  
第三十二章 農村の警察  
第三十三章 農村の消防  
第三十四章 農村の保健  
第三十五章 農村の福利  
第三十六章 農村の教育  
第三十七章 農村の衛生  
第三十八章 農村の福利  
第三十九章 農村の政治  
第四十章 農村の文化  
第四十一章 農村の宗教  
第四十二章 農村の風俗  
第四十三章 農村の習慣  
第四十四章 農村の法律  
第四十五章 農村の行政  
第四十六章 農村の司法  
第四十七章 農村の警察  
第四十八章 農村の消防  
第四十九章 農村の保健  
第五十章 農村の福利

白神正吉氏著 本書を讀まずして農村を語る勿れ

農村振興根本方策

四六版上製函入美本  
定價金一圓二十錢  
送料十錢

農村振興根本方策  
著者 白神正吉  
序 農村の現状と其の將來  
第一章 農村の歴史  
第二章 農村の地理  
第三章 農村の人口  
第四章 農村の産業  
第五章 農村の交通  
第六章 農村の教育  
第七章 農村の衛生  
第八章 農村の福利  
第九章 農村の政治  
第十章 農村の文化  
第十一章 農村の宗教  
第十二章 農村の風俗  
第十三章 農村の習慣  
第十四章 農村の法律  
第十五章 農村の行政  
第十六章 農村の司法  
第十七章 農村の警察  
第十八章 農村の消防  
第十九章 農村の保健  
第二十章 農村の福利  
第二十一章 農村の教育  
第二十二章 農村の衛生  
第二十三章 農村の福利  
第二十四章 農村の政治  
第二十五章 農村の文化  
第二十六章 農村の宗教  
第二十七章 農村の風俗  
第二十八章 農村の習慣  
第二十九章 農村の法律  
第三十章 農村の行政  
第三十一章 農村の司法  
第三十二章 農村の警察  
第三十三章 農村の消防  
第三十四章 農村の保健  
第三十五章 農村の福利  
第三十六章 農村の教育  
第三十七章 農村の衛生  
第三十八章 農村の福利  
第三十九章 農村の政治  
第四十章 農村の文化  
第四十一章 農村の宗教  
第四十二章 農村の風俗  
第四十三章 農村の習慣  
第四十四章 農村の法律  
第四十五章 農村の行政  
第四十六章 農村の司法  
第四十七章 農村の警察  
第四十八章 農村の消防  
第四十九章 農村の保健  
第五十章 農村の福利







下村虎六郎氏著

人生を語る

格校長本そ親體... 現大日本聯合青年團講習所長 下村虎六郎氏著

現大日本聯合青年團講習所長 下村虎六郎氏著

教育的反省

るつてとた青... 現大日本聯合青年團講習所長 下村虎六郎氏著

四六版クローヌ 定製函入美本 送料一圓二十錢

四六版クローヌ 定製函入美本 送料一圓二十錢

江坂佐太郎氏著

新興の農村

は何れも一部の人... 江坂佐太郎氏著

四六版クローヌ 定製函入美本 送料一圓二十錢

江坂佐太郎氏著

園藝農産物販賣の合理化

最近園藝業は傾... 園藝農産物販賣の合理化

菊版クローヌ 定製函入美本 送料一圓二十錢







帝國美術院會員 荒木十畝畫伯口繪  
朝鮮總督陸軍大將 宇垣一成閣下題字  
明晨派陰陽研究會長 戸田景明先生著

運命開拓の一大福音書

萬戸必備  
の大寶典

# 家相眞法

菊版上製函入美本  
口繪挿畫約百個  
定價金二十圓  
送料十四錢

前編に於て地相、中編に於て家相、更に後篇に於て六十個の挿圖を以て簡易平明に家相法の全般を解説し、附録(漫談)に於ては、最近の中等家事教科書及各種雜誌に掲げられたる、文化住宅圖等を採録して、忌憚なく、凶反應の説明を加へ、尙ほ神社佛閣、學校會社工場及びビルディング、旅館、寄宿舎借家、乃至市街地の家相を農村の家相等廣汎に互り實例をも擧げて批判を加へたもので、何人と雖も、旅館、寄宿舎借家、乃至市街地の家相を指すを得ることが出來る。實例をも擧げて批判を加へたもので、何人と雖も、旅館、寄宿舎借家、乃至市街地の家相を指南書である敢て江湖に薦獎す。

中島 靜夫氏 著

一家に  
備へる  
必用書

自力  
更生

# 自家用食料品の製法

四六版假製  
定價金二十錢  
送料四錢

饒近内外經濟界の異狀なる不況は、遂に平和な農村をして、疲弊困憊の極に達せしめた。今にして更生の策を樹立せざれば、國家の進展に關係する所多しと考へ、朝野を擧げて經濟更生運動の絶叫せらるるに至れり。而してこれが更生を圖るの途は多岐多端に亘ると雖も、要は農民の自力更生により經濟生活の安定に依らざる可らず。本書は農民生活に直面せる、食料品製法の實際を親切丁寧に述べ、非常時に對する家事經濟の更生を計るは固より他面に於ては農産製造により、農業經濟の刷新を遂げしめんと欲するものなり。殊に本書により、農民は固る生活の更生に資せんがために編纂したるものなれば、安價にして適切なる良書たる事は、敢て大方に推薦す

帝國法律研究會編

# 改正地方制度諸法規

三五版七百頁  
皮製辭典形美本  
定價金一圓三十錢  
送料八錢

原人時代に於ては勿論法規と云ふものはなかつた、それが遊收時代が過ぎ農業時代となつて人口が増加し土着するると同時に財產の保護、領域の限界等に就て争ひを生ずる事になる。そこで自然に一つの申合せ即ち法が益々多くなり、人が抑も法の始めである。而して人口が増加し、社會組織が複雑となるにつれて法の種類が多くなり、吾人生活に法を離れて存立しない様になつた。本書は此の人間生活に必要な諸法規を蒐集し、本書は實用を本位として編輯したものであるから、何れの家庭に於ても米と共に一本備へなければならぬ良書である。

辯護士 並木信政氏 著

# 願書式大成 附民法講義

四六版五百四十頁  
上製函入美本  
定價金八十五錢  
送料十二錢

本書は日常身邊に起つて來るべき貸借、賣買、讓渡、質入、抵當、請負、雇傭登記、戸籍、寄留、兵事、營業、出版、納稅事項、民事、刑事、訴訟及び人事訴訟手續等に關する證書、願書、申請、申立、訴訟並に添附書類の書式を極めて明瞭に何人にも利用し得るやうに集録してあります。世の中が複雑になり、人の生活が多忙になればなる程この種の輕便な指導書が必要である。複雑な社會を單純化し、事業の能率を増進する上から何れの家庭にも本書一部を備へられたし。







山崎 延吉氏著	若き人々へ	價一、五〇	古瀬 傳藏氏著	百姓だつて人間だ	價一、五〇
山崎 延吉氏著	世に立つ道	價一、五〇	相原言三郎氏著	農村更生の道	價一、五〇
山崎 延吉氏著	農村の道	價一、五〇	竹原 貞治著	農業の認識と更生の道	價一、五〇
山崎 延吉氏著	齊家の説	價一、五〇	田村 浩氏著	自力更生と農村救済案	價一、五〇
山崎 延吉氏著	農村の全村學	價一、五〇	大杉 房吉氏著	農村を語る	價一、五〇
山崎 延吉氏著	農村の近道	價一、五〇	丸山 義二氏著	地方青年の覺醒	價一、五〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何を爲すべきか	價一、五〇	石田 傳吉氏著	農村の副業	價一、五〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	江坂佐太郎氏著	セルリ栽培の實際	價一、五〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	鈴木 富治氏著	アンゴラ兔の飼ひ方	價一、五〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	山本 哲夫氏著	準人瓜栽培の實際	價一、五〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	馬 俊雄氏著	蔬菜栽培要訣	價一、五〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	林原 秋男氏著	蔬菜園藝	價一、五〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	中山 文一氏著	作物病理論 上下	價一、五〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	波多腰 節氏著	作物害虫論 上下	價一、五〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	坂井辰三郎氏著	畜産製造學	價一、五〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	坂井辰三郎氏著	農業肥料學	價一、五〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	稲葉甲午郎氏著	おいしい漬物のつけかた	價一、五〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	高岡 好廉氏著		
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	中島 靜夫氏著		
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、五〇	川崎 甫 氏著		

農業經濟研究會	農家負債整理組合法問答	價一、五〇	高橋 廣治氏著	實利採卵養鶏法	價一、五〇
田村 浩氏著	農漁村共產體の研究	價一、五〇	高橋 廣治氏著	人工孵化育雛法	價一、五〇
吉地昌一氏著	田園の榮光	價一、五〇	高橋 廣治氏著	孵化育雛寶典	價一、五〇
上塚 司氏著	新興の農村	價一、五〇	高橋 廣治氏著	鶏の飼養管理	價一、五〇
谷本龜次郎氏著	農産物増収法	價一、五〇	高橋 廣治氏著	私の鶏舎のいろいろ	價一、五〇
江坂佐太郎氏著	米道	價一、五〇	高橋 廣治氏著	家禽病理治療法	價一、五〇
山崎 延吉氏著	米道	價一、五〇	高橋 廣治氏著	鰯の養殖法	價一、五〇
岩槻 信治氏著	米道	價一、五〇	高橋 廣治氏著	鰯と七面鳥	價一、五〇
市川實太郎氏著	米道	價一、五〇	高橋 廣治氏著	精神文化の諸問題	價一、五〇
市川實太郎氏著	米道	價一、五〇	高橋 廣治氏著	歐洲巡遊と其印象	價一、五〇
安城農藝研究會	農藝寶典	價一、五〇	高橋 廣治氏著	家相眞法	價一、五〇
並木 信政氏著	農藝寶典	價一、五〇	高橋 廣治氏著	日本婚禮式	價一、五〇
帝國法律研究會	改正地方制度諸法規	價一、五〇	高橋 廣治氏著	池の坊流花の生け方	價一、五〇
八住利雄氏著	改正地方制度諸法規	價一、五〇	高橋 廣治氏著	自家用食料品の製法	價一、五〇
關口晃南氏著	改正地方制度諸法規	價一、五〇	高橋 廣治氏著	子供洋服の裁方と縫ひ方	價一、五〇
清水 清氏著	改正地方制度諸法規	價一、五〇	高橋 廣治氏著	茶の湯・盆石作法	價一、五〇
川端千枝子著	改正地方制度諸法規	價一、五〇	高橋 廣治氏著	茶の湯・盆石作法	價一、五〇
松村又一氏著	改正地方制度諸法規	價一、五〇	高橋 廣治氏著	茶の湯・盆石作法	價一、五〇
金 素雲氏著	改正地方制度諸法規	價一、五〇	高橋 廣治氏著	茶の湯・盆石作法	價一、五〇
東京音樂研究會	改正地方制度諸法規	價一、五〇	高橋 廣治氏著	茶の湯・盆石作法	價一、五〇



山崎延吉先生著

# 續農村自治の研究

四六判二百四十余頁  
洋裝清酒箱入  
定價金壹圓參拾錢  
郵税金拾錢

この非常時局に直面し、著者愛國の至情から、敢然立つて櫃底に秘められたこの一大經典を世に贈らんとす。言々句句、一讀情夫をも立たしむ。

自序の節一吾輩は愛國の至情、愛民の誠意よりして自治の振興を希ひ、農村自治の研究を公にした。同時に四方に奔走して地方自治の振作地方改良の進歩に微力を輸たしたものである。自治制發布されて後、我國の教育には自治制が閉却され、教育家は歐米教育者の精粕を嘗めて、自治教育に着眼する者がなかつた。故に自治は何時までも不振である。不相變官僚の願使に甘んずる。これでは立憲治下の國民では無く、明治天皇の有難き思召を粗略する事でもあれば帝國臣民としては看過すべからざることである。

中村吉五郎著

農家の知囊 第十一篇

學校家庭 小温室の造り方と管理

定價金六拾九錢  
送料共

渡會喜七著

農家の知囊 第十二篇

尾張の蔬菜栽培と販賣法

定價金八拾六錢  
郵税金共

愛知縣六ツ美 農業補習學校長 長谷川一男著

菜種改良栽培の研究

菊判約五百頁七十圖  
定價未定四圓の豫定



660  
108

9年7月29日

109

解	解	解	解	解	解	解	解	解	解
解	解	解	解	解	解	解	解	解	解
解	解	解	解	解	解	解	解	解	解
解	解	解	解	解	解	解	解	解	解
解	解	解	解	解	解	解	解	解	解
解	解	解	解	解	解	解	解	解	解
解	解	解	解	解	解	解	解	解	解
解	解	解	解	解	解	解	解	解	解
解	解	解	解	解	解	解	解	解	解
解	解	解	解	解	解	解	解	解	解

閱  
覽  
元  
濟



